小島清一用

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書　第２集

鍛冶谷・新田口遺跡 V

１９９０

戸田市遺跡調査会

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書　第２集

鍛冶谷（かじや）・新田口（しんでんぐち）遺跡 V

1990

戸田市遺跡調査会

はじめに

戸田市遺跡調査会会長　岡　田　　弘

昨今、本市一際の発展ぶりは、正に我と我が目を疑うばかりの勢いです。

そのさ中に第５次鍛冶谷・新田口遺跡発掘調査の成果がこの小冊子の形を借りて世に問われる運びとなり、喜びに耐えません。

平成元年１月のこと、当教育委員会の試掘調査により現地が埋蔵文化財包蔵地と判明。事業者たる株式会社エービーシー商会は文化財保護法の趣旨を深く理解され、直ちに発掘調査を許可。一連の手続きを経て発掘作業に着手。

時はといえば厳寒の２月、当会会員を中核とする市民、学生計１６名の方々の文字通り献身的な作業によって本文記載のような貴重な結果が得られたのです。

鍛冶谷・新田口遺跡の発掘調査は、昭和42年の夏にまで遡る本市にとっての一大事業となっていますが、実に20余年にわたって営々と収集された古代人たちからのメッセージの数々は、この戸田市に今という時代を生きている人々の心に、戸田市に対する新鮮な歴史的、社会的、文化的共感といったものを掻き立てずにはおかないのではないでしょうか。もっとも、それらの情報を町づくりの観点から、あるいは生涯学習の立場から、市民生活の中にどう生かし、どう使うかは、専ら今後における行政の課題に属していることです。最後となりましたが、本事業に対し多大な御理解を賜りました株式会社エービーシー商会の皆様、そして直接の発掘に貢献されました有志の皆様方に改めて深い感謝の念をささげ、あいさつといたします。

例　　言

1　本書は、埼玉県戸田市上戸田５－27－１他の事務所建設工事に伴って発掘調査された鍛冶谷・新田口遺跡第５次調査の発掘調査報告書である。

2　発掘調査事業及び整理事業は、事務所建設の事業者である(株)エービーシー商会（東京都千代田区永田町２－12－14）から、戸田市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。

3　発掘調査は、平成元年２月１日から２月23日にわたって行った。また、整理作業は平成元年３月28日から９月30日まで行った。

4　発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。

発掘担当者　　小島清一（戸田市教育委員会　社会教育課）

5　出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により中山浩彦、香林勉を中心として整理参加者全員で行った。

6　調査写真及び遺物の写真は、小島が撮影し、渡辺咲子の協力を得た。

7　本書の執筆は、小島が行った。なお、出土遺物の観察表は中山浩彦が作成した。

8　発掘調査から報告書を作成するまでの過程で、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

今井正文、岡田賢治、塩野博、高橋和子、
西口正純、福田聖、深澤悠紀雄、伊藤和彦、
大竹仁、佐藤勝巳、遠山薫子、渡辺咲子、
戸田市建設部土木課

9　発掘調査及び整理参加者は、下記のとおりである。（順不同）

五十嵐紀志子、伊藤美代子、上原勇、岡崎久子、
香林勉、須藤輝子、関徳太郎、粒良紀夫、
中山浩彦、高松国光、高松テル、長瀬麻子、
沼上透、長谷川知秀、広瀬幸子、本間チヨ、
森愛子、渡辺豊子、高橋明、西袋哲也、
薊修司、和田茂穂

目　　次

はじめに　　戸田市遺跡調査会会長　岡田　弘

例　言

凡　例

1　発掘調査に至るまでの経過 …… 1

2　発掘調査の経過 …… 1

3　遺跡の立地と環境 …… 3

4　遺跡の概観 …… 5

5　遺構と出土遺物 …… 8

（1）　住居跡と出土遺物 …… 8

（2）　方形周溝墓と出土遺物 …… 16

（3）　土壙と出土遺物 …… 30

（4）　溝と出土遺物 …… 33

（5）　その他の遺構と出土遺物 …… 42

（6）　グリッド出土の遺物 …… 42

6　結　語 …… 47

（1）　遺構について …… 47

（2）　出土土器について …… 47

（3）　まとめ …… 49

挿　図　目　次

第１図　鍛冶谷・新田口遺跡Ｖと周辺の遺跡位置図 …… 4
第２図　鍛冶谷・新田口遺跡調査地位置図 …… 6
第３図　鍛冶谷・新田口遺跡Ｖ遺構配置図 …… 7
第４図　基本土層図 …… 7
第５図　第１号住居跡実測図 …… 8
第６図　第１号住居跡遺物出土位置図 …… 9
第７図　第１号住居跡出土遺物実測図 …… 10
第８図　第２号住居跡実測図 …… 13
第９図　第２号住居跡遺物出土位置図 …… 14
第10図　第２号住居跡出土遺物実測図 …… 14
第11図　第１・２号方形周溝墓実測図 …… 17
第12図　第１・２号方形周溝墓遺物出土位置図(1) …… 19
第13図　第１・２号方形周溝墓遺物出土位置図(2) …… 21
第14図　第１・２号方形周溝墓遺物出土位置図(3) …… 22
第15図　第１号方形周溝墓出土遺物実測図(1) …… 23
第16図　第１号方形周溝墓出土遺物実測図(2) …… 24
第17図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 28
第18図　第１号土壙実測図 …… 30
第19図　第１号土壙遺物出土位置図 …… 30
第20図　第１号土壙出土遺物実測図 …… 31
第21図　第１号溝実測図 …… 34
第22図　第１号溝遺物出土位置図(1) …… 34
第23図　第１号溝遺物出土位置図(2) …… 35
第24図　第１号溝出土遺物実測図 …… 35
第25図　第２号溝実測図 …… 37
第26図　第２号溝遺物出土位置図(1) …… 37
第27図　第２号溝遺物出土位置図(2) …… 38
第28図　第２号溝出土遺物実測図 …… 38
第29図　第３・４号溝実測図及び遺物出土位置図 …… 39
第30図　第３・４号溝出土遺物実測図 …… 40
第31図　第５・６・７号溝実測図及び遺物出土位置図 …… 42
第32図　第１～43号ピット実測図 …… 43
第33図　ピット及びグリッド出土遺物実測図 …… 45

表　目　次

第1表　第1号住居跡出土遺物(1) …… 11
第2表　第1号住居跡出土遺物(2) …… 12
第3表　第2号住居跡出土遺物 …… 15
第4表　第1号方形周溝墓出土遺物(1) …… 24
第5表　第1号方形周溝墓出土遺物(2) …… 25
第6表　第1号方形周溝墓出土遺物(3) …… 26
第7表　第1号方形周溝墓出土遺物(4) …… 27
第8表　第2号方形周溝墓出土遺物(1) …… 27
第9表　第2号方形周溝墓出土遺物(2) …… 28
第10表　第2号方形周溝墓出土遺物(3) …… 29
第11表　第1号土壙出土遺物(1) …… 32
第12表　第1号土壙出土遺物(2) …… 33
第13表　第1号溝出土遺物 …… 36
第14表　第2号溝出土遺物 …… 38
第15表　第3・4号溝出土遺物 …… 41
第16表　ピット一覧表 …… 44
第17表　ピット及びグリッド出土遺物(1) …… 45
第18表　ピット及びグリッド出土遺物(2) …… 46

図　版　目　次

図版1　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴの位置
　　調査区全景（東から）
図版2　第1号住居跡（南から）
　　第2号住居跡（南から）
図版3　第1号住居跡土器出土状態
　　第2号住居跡炭化物出土状態
図版4　第1・2号方形周溝墓（南西から）
　　第1号方形周溝墓　南溝東側
図版5　第1・2号方形周溝墓　北溝（東から）
　　第1号方形周溝墓土器出土状態
　　第2号方形周溝墓土器出土状態(1)・(2)
図版6　第1号土壙（北から）
　　第1号土壙土器出土状態
図版7　第1号溝（東から）
　　第1号溝遺物取り上げ風景
図版8　第1～43号ピット全景（南西から）
　　第2号溝（北西から）
　　第3・4号溝（南から）
　　第5・6号溝（西から）
　　第7号溝（西から）
図版9　第1・3・4・5・6・7・8・9号ピット
図版10　第1号住居跡出土遺物(1)～(6)
図版11　第1号住居跡出土遺物(7)
　　第2号住居跡出土遺物
　　第1号方形周溝墓出土遺物(1)～(4)
図版12　第2号方形周溝墓出土遺物(1)～(3)
　　第1号土壙出土遺物(1)・(2)
図版13　第1号溝出土遺物(1)・(2)
　　第2号溝出土遺物(1)・(2)
　　第13号ピット出土遺物
　　グリッド出土遺物

発掘調査の組織

会長	戸田市教育委員会教育長	岡田　弘
理事（会長代理）	戸田市教育委員会教育次長	青木健二
理事	戸田市文化財保護委員会委員	金子　弘
〃	〃	萩原勝明
〃	戸田市開発部都市計画課課長	渡辺英隆
〃	戸田市開発部市街地開発課課長	熊谷清志
〃	戸田市建設部建築課課長	杉浦剛男
〃	戸田市教育委員会社会教育課課長	長谷川忠信
〃	〃	田中栄八
監事	戸田市社会教育委員会委員長	草刈栄芳
〃	戸田市郷土博物館館長	深沢悠紀雄
〃	〃	村上義彦
事務局長	戸田市教育委員会社会教育課課長	長谷川忠信
〃	〃	田中栄八
事務局員	戸田市教育委員会社会教育課課長補佐	秋葉茂夫
〃	〃　社会教育係長	田中隆一
〃	〃　〃	和田　卓
〃	〃　社会教育課主任	籐　のり子
調査員	〃　社会教育課学芸員	小島清一

凡　　例

○　本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図1／80・1／40、遺物実測図1／4である。それ以外は、図に添えたスケールを参照されたい。

○　出土遺物の観察表における胎土の記号は、下記のとおりである。

A：石英、B：金雲母、C：斜長石、D：黒く光る石、E：赤色粒子、F：白色粒子、G：褐色粒子、H：砂粒子

○　土層図中の水糸レベルは、基本土層図を除きすべて標高2.5mである。

1　調査に至るまでの経過

昭和63年10月27日、東京都千代田区永田町２－12－14の株式会社エービーシー商会代表取締役佐村正一氏（以下「事業者」という。）から、戸田市上戸田５丁目27番１号他に事務所建設の開発行為に伴う事前協議がなされた。

戸田市では、昭和60年の埼京線の開通により共同住宅等の開発が進み、文化財の保護が急務となっている。このような状況において、戸田市教育委員会では、開発担当所管課と各種の協議を実施して文化財保護と開発事業との調整を図っている。

鍛冶谷・新田口遺跡は、昭和42年に初めて調査が行われて以来、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が存在することが明らかになっている。

教育委員会では、当該地が鍛冶谷・新田口遺跡に隣接するため、埋蔵文化財が所在する可能性が高いものと判断し、事業者に試掘調査を実施する旨通知した。

試掘調査は、平成元年１月18・19日の２日間にわたり実施した。結果、古墳時代前期の住居跡及び溝（方形周溝墓）等の遺構や遺物が検出された。そこで、当該地には埋蔵文化財が所在する旨事業者に通知し、その取り扱いについて教育委員会と事業者で協議が行われた。遺跡の保存については、既に開発許可がなされ計画を変更することが不可能であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

これをもって事業者からは、平成元年１月27日付で、文化財保護法第57条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘届が文化庁長官あてに提出された。発掘調査に際し、教育委員会と事業者で協議を重ね、事業が緊急を要することを考慮し、戸田市遺跡調査会会長と事業者は平成元年１月31日に事業委託契約を締結し、調査は平成元年２月１日から開始することとなった。

戸田市遺跡調査会からは、文化財保護法第57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘届が文化庁長官あて提出された。

なお、文化庁長官からは平成元年６月６日付、委保第５の290号をもって発掘届を受理した旨通知があった。

2　発掘調査の経過

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴの発掘調査は、平成元年２月１日から２月23日までの23日間で実施した。調査決定後、作業が緊急を要したため、あわただしい中の調査となった。幸いにも、天候的には雨天等による作業中止の日が少なく、日程的に厳しいながらも最後まで順調に調査を行うことができた。以下、調査経過が４期に区分できるので整理しながら経過を見ていきたい。

（２月１日～３日）

早朝から発掘調査が始まる。試掘調査の結果をもとに調査区域を設定し、遺構確認面の黄褐色土層

の上層まで重機による表土掘削作業を慎重に行った。途中、前建築物の盛土等の撹乱が厚く作業が困難を極めた。なお、調査区北西部のコンクリートが深く入り込んでいたため動かず、残存したままとなってしまった。

（2月4日～7日）

表土除去の後、調査作業員の人力により暗褐色土層を掘削していき、歴史時代等の遺構確認作業を行ったが認められず、黄褐色土層を表出させた。次に黄褐色土層の精査を行った。結果、古墳時代の遺構及び遺物が検出され、調査区内の概要が明らかとなる。住居跡2軒、方形周溝墓2基、その他溝等である。なお、遺構並びに遺物の測量のため、基準点測量を2月7日に行った。

（2月8日～20日）

遺構確認作業の結果をもとに、各遺構の調査を開始する。調査は遺物の取り上げ状況等の様子を見ながら各遺構とも並行するかたちで進めた。調査については、覆土の状況を明らかにするために断面図・写真撮影用のベルトを設定し、掘り下げる作業を行った。各遺構から出土する遺物の取り上げについては、できる限り分布図に点を落とした。また、各遺構調査中、断面及び平面から測量し、記録写真を残す作業を進行状況に応じて随時行った。

（2月21日～23日）

検出された遺構の全体の測量、及び写真の撮影を行った。23日午前中に作業を終え、午後からは資材を撤収し、現地に於けるすべての作業を終了した。

調査日数23日、参加延べ人員203名であった。

発掘調査風景

3　遺跡の立地と環境

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴ（第５次調査）の調査地は、戸田市上戸田５丁目27番１号他に所在する。本市では昭和42年に初めて調査が行われた遺跡である。

戸田市は、埼玉県の南端に位置し、荒川左岸の流路に並行して細長く「く」の字に屈曲した自然堤防とそして後背湿地からなる。行政的には、東は川口市、北は浦和・蕨両市、西から南は荒川を境にして朝霞・和光両市、そして東京都板橋区・北区に接している。面積は18.11㎢である。市の中央部には東北・上越新幹線及び埼京線が、東部を中山道、西部を新大宮バイパスが南北に通っている。かつて荒川には「戸田の渡し」、「早瀬の渡し」がそれぞれにあって、昔から交通の要所となっていたところでもある。荒川は西部では北西から南東へ流れ、笹目付近で東へ方向を変え、南部ではほぼ東西に流路をとっている。

鍛冶谷・新田口遺跡は、この荒川（旧入間川）によって形成された、火山灰質の砂質粘土からなる黄褐色土層を基盤とする、低平な自然堤防上の微高地の北端縁に立地する。標高は約3.5ｍを測る。北側は後背湿地（現在は埋め立てられ宅地化が進んでいる。）となり、南側はボートコース付近まで自然堤防が続く。本市に存在する大部分の遺跡は、この自然堤防上に立地している。

周辺の遺跡としては、第１図に記したとおりである。本遺跡を含めて５箇所の遺跡が近在しており、いずれも弥生時代後期または古墳時代前期の集落跡をはじめとする遺跡である。本遺跡は№２である。以下、周辺遺跡の説明を加えたい。

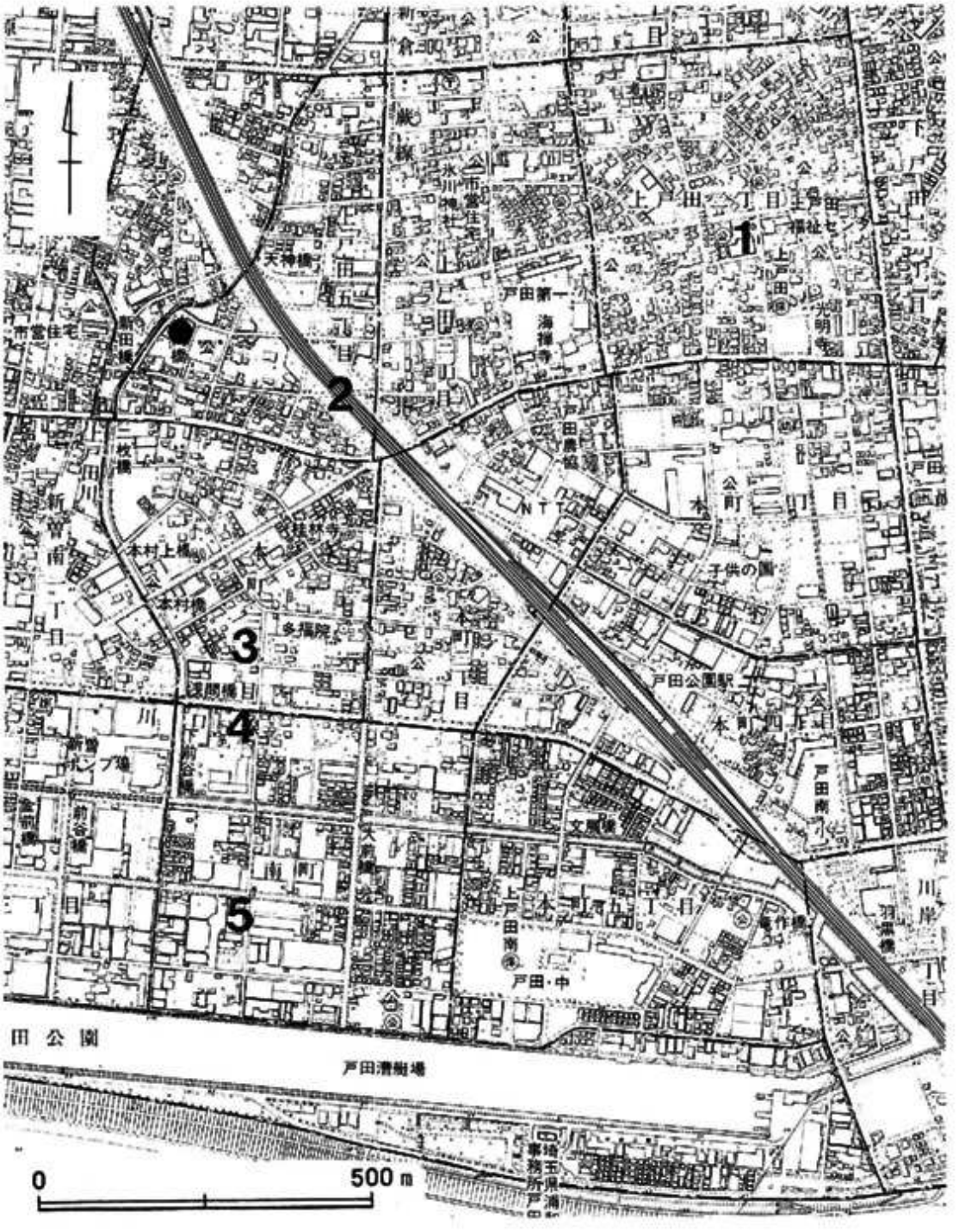
№１は前谷遺跡で、昭和47年に発掘調査が行われており、弥生町期（弥生時代後期）及び五領期（古墳時代前期）の方形周溝墓各１基をはじめ、古墳時代や平安時代の溝、土壙、ピット群等の遺構や溝から検出された須恵器や土師器、灰釉陶器等の遺物が検出されている。特に灰釉陶器は、長頸壺・高台付皿・椀で愛知県猿投山西南麓の古窯跡群で９世紀から11世紀にかけて生産されたものであることが確認されている。

№３は上戸田本村遺跡である。昭和53年に市史編纂事業の一環として発掘調査を実施している。ここからは、五領期の方形周溝墓及び住居跡、鬼高期（古墳時代後期）の住居跡等が検出されている。なお、市内唯一残存（但し墳丘は開墾され原形をとどめていない）の「くまん塚」古墳がこの地にあり、直刀二振が出土している。

№４は南町遺跡である。この遺跡は昭和61年に共同住宅の開発に伴う事前調査として発掘されたもので、五領期の大型１基を含む２基の方形周溝墓とピットが検出されている。また、中・近世の板石塔婆や宝篋印塔の相輪等を出土している溝や土壙があり、当時の中・近世墳墓の存在の可能性が考えられる。

№５は南原遺跡である。昭和44年から現在まで４次にわたって調査が行われている。結果、五領期の方形周溝墓７基と円形周溝墓３基が、また五領期及び鬼高期の住居跡８軒、その他円墳跡、ピット群、堀、溝等が検出されている。特に円墳跡の周堀内からは、円筒埴輪や人物埴輪が検出されている。

以上が鍛冶谷・新田口遺跡周辺の状況である。弥生時代後期から古墳時代前期及び古墳時代後期の集落が接近して存在している様子がうかがえる。



1. 前谷遺跡　2. 鍛冶谷・新田口遺跡　3. 上戸田本村遺跡
4. 南町遺跡　5. 南原遺跡　● 鍛冶谷・新田遺跡Ⅴ

第1図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴと周辺の遺跡位置図

4　遺跡の概観

鍛冶谷・新田口遺跡は、荒川（旧入間川）によって形成された火山灰質の砂質粘土からなる黄褐色土層を基盤とする自然堤防の北端縁に立地した弥生時代、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡である。

現在は区画整理がなされ、「上戸田」という地番となっているが、元は「鍛冶谷」「新田口」という名称であった。したがって、当初は「鍛冶谷遺跡」として調査が行われている。その後、第２次調査において新田口地区にも遺跡が及ぶことが確認され『鍛冶谷・新田口遺跡』と称することとしている。

本遺跡は、戸田市において遺跡の発掘調査のはじめになったところである。その発端は昭和42年に遡ることができる。その発見は戸田の郷土史に深い関心をもっていた一市民が鯉のぼりの柱を立てる作業をしていた時、一片の土器がエンビの先についていたことに始まる。戸田市教育委員会では慎重に取り扱い発掘調査が行われることとなった。以来、第２図にも示したように市においては本調査を含めると５次にわたり、また東北・上越新幹線及び埼京線の敷設工事に伴って大規模な調査も行われている。

今までの調査の結果、住居跡（37軒）や方形周溝墓（101 基）等の遺構が折り重なるように構築され、出土品としても弥生時代後期から古墳時代前期の壺形土器や甕形土器等の土器類、そして同時期の勾玉や管玉等の玉類、はしごや斧の柄等の木製品等々、多数の遺物が検出され、大規模な集落跡であることが確認されている。

第５次調査は、遺跡の北西縁に位置する。試掘調査の時点では炭化物を一面に残す住居跡が２軒、溝（方形周溝墓）２基が検出され、鍛冶谷・新田口遺跡と同様な集落の特徴を示すことが確認された。発掘調査は重機により表土の掘削から取りかかった。しかし、調査の直前まで工場が建っており、また、厚い撹乱土によって困難を極めたが自然堆積の土層が表出するにしたがって遺構の様子も明らかとなった。調査区内からは住居跡２軒、方形周溝墓２基、溝７本、土壙１基、ピット43箇所が検出された。調査区内における遺構の在り方は、今までに検出されている状況と同様で住居跡や方形周溝墓、溝等が折り重なるように構築されている。遺物も当初から多量に出土していた。

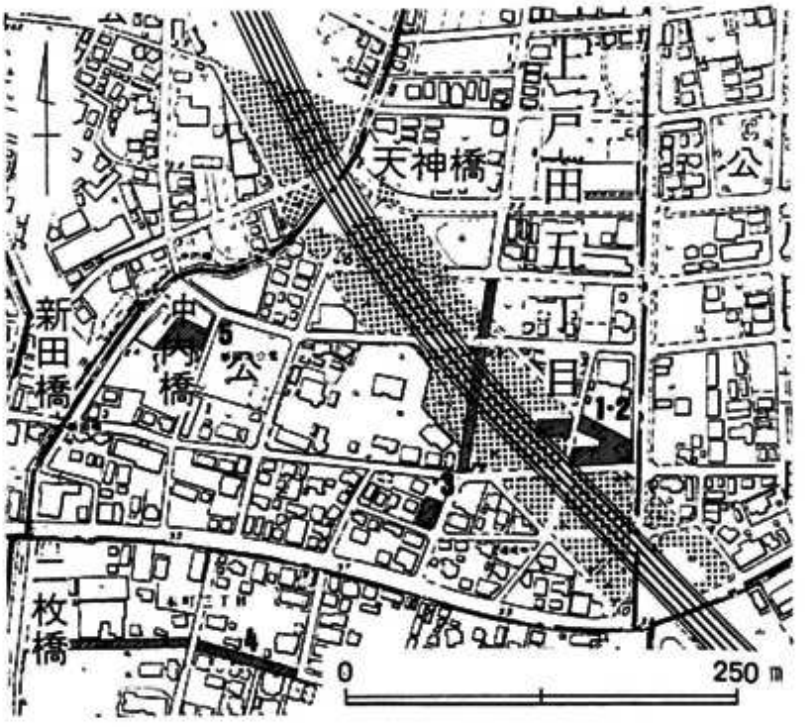
住居跡は２軒検出されている。２軒とも他の重複する遺構や撹乱によって全容は明らかではないが、炭化物や炭化材が多量に出土する焼失家屋である。

方形周溝墓は２基である。第１号方形周溝墓と第２号方形周溝墓は開口部方向を同じくするものである。北溝においては、ほぼ重なる様に構築され、第１号に第２号がすっぽり入る形となる。第２号方形周溝墓は南西部コーナーに土壙状の掘り込みがあり、さらに炭化物・焼土・高坏が検出されていることから溝中埋葬施設を伴う遺構と考えられる。

溝は７本検出されている。第１号溝、第３号溝等全容は明らかではないものの、その形態や出土遺物から方形周溝墓の可能性が高い。

土壙は１基である。小型壺や広口壺等が出土し、保存状態も良好である。

ピットは43箇所検出された。大型・中型・小型とに分けることができ、それぞれまとまった遺構の存在も考えられる。

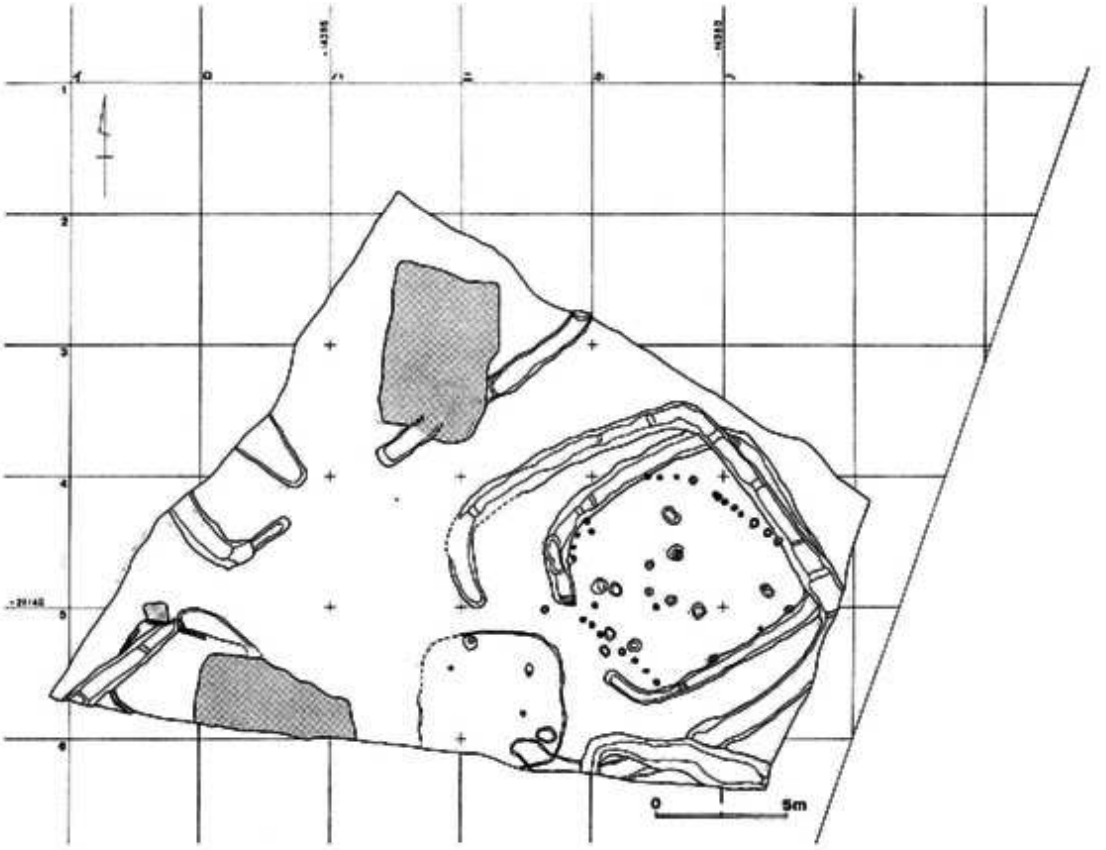


第２図　鍛冶谷・新田口遺跡調査地位置図

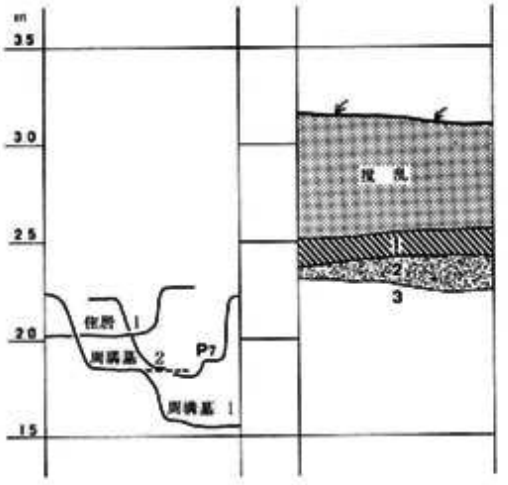
戸田市教育委員会調査
1. 第１次（１９６７）
2. 第２次（１９６８）
3. 第３次（１９８２）
4. 第４次（１９８３）

戸田市遺跡調査会調査
5. 第５次（１９８９）

（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査
（１９８２～１９８４）



第３図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴ遺構配置図



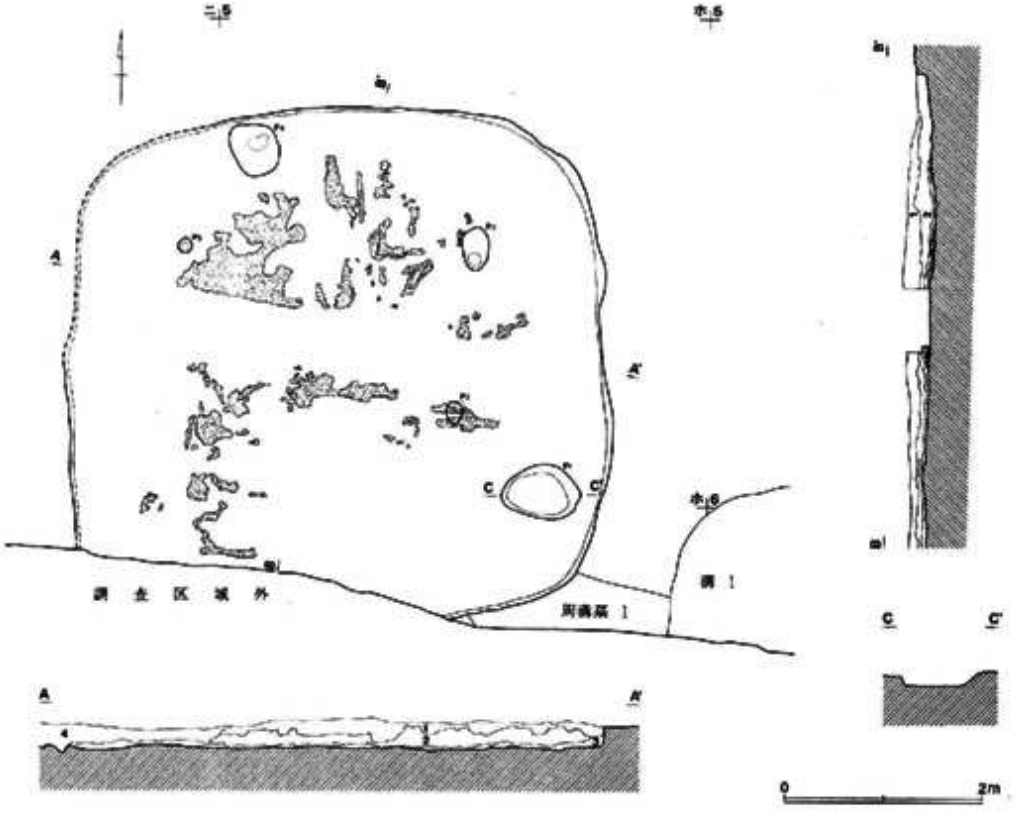
土層註

1. 暗褐色土
   橙色粒子を微量含む
   粘性弱いがよくしまる
2. 暗褐色土
   橙色粒子を一様に少量含む
   粘性弱いがよくしまる
   （１層よりも粘性は強い）
3. 黄褐色土
   粘土質土層
   粘性強くよくしまる

第４図　基本土層図

5　遺構と出土遺物

(1)　住居跡と出土遺物



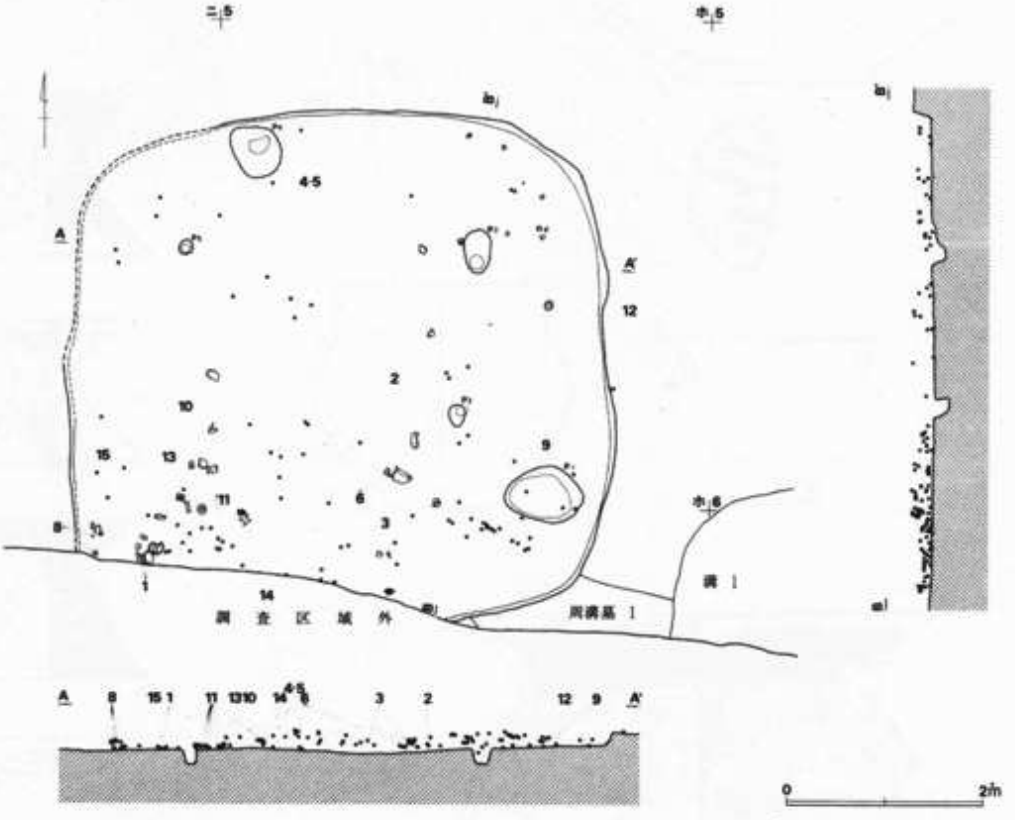
土層註

1. 明褐色土　　黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性、しまりとも強い。
2. 暗褐色土　　黄褐色粘土粒子を一様に多量に含む。粘性、しまりとも強い。
3. 暗褐色土　　黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性、しまりとも強い。（床面直上で炭化物を含む）
4. 暗褐色土　　橙色粒子を一様に少量含む。

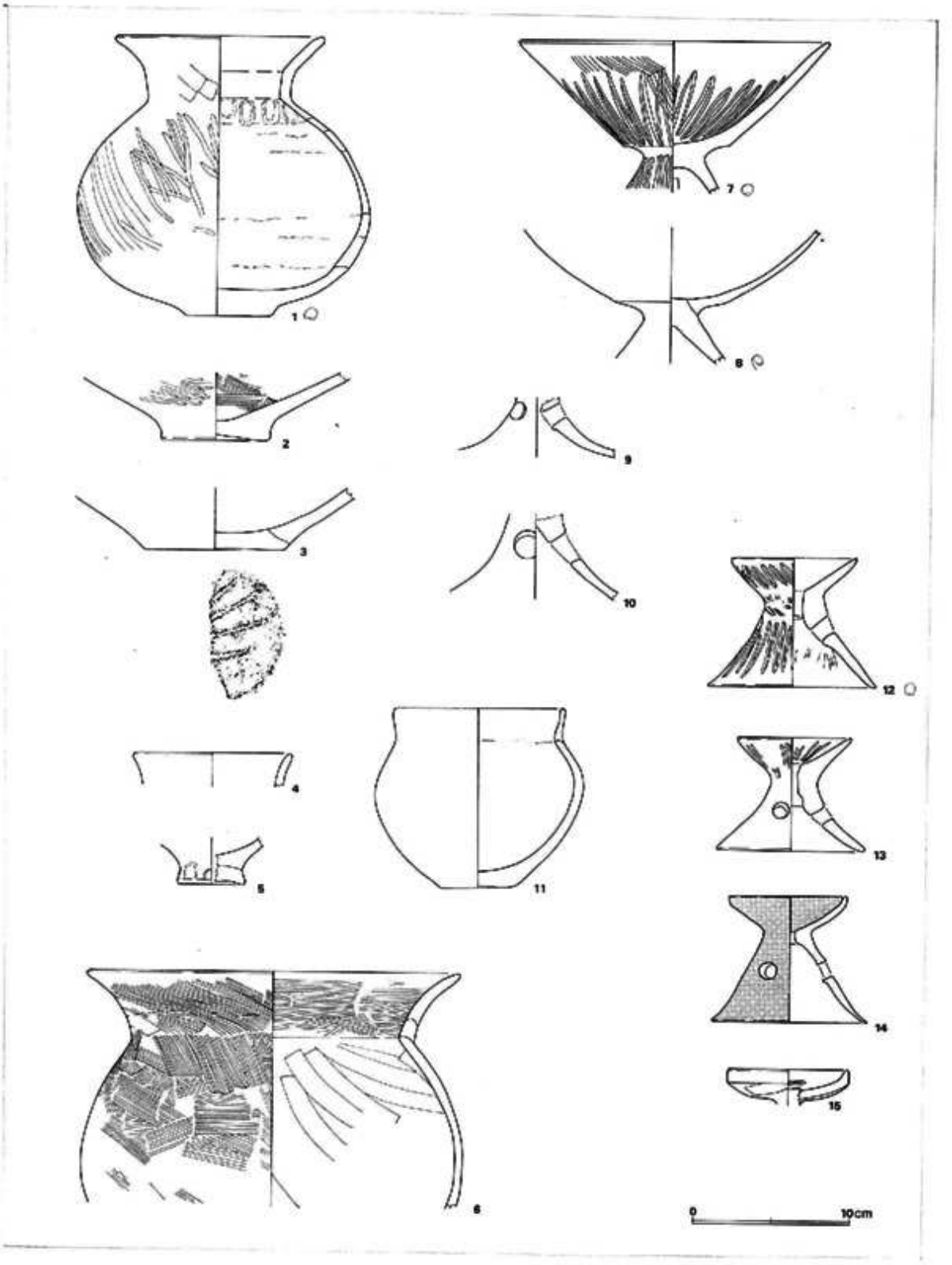
第５図　第１号住居跡実測図

第１号住居跡（第５・６図）

調査区の南側ハ～ニ－５～６グリッドに位置する。住居跡南側一部が調査区域外となり、北西隅に攪乱を受ける。第１号方形周溝墓と南東隅で切り合って構築されているが、第１号方形周溝墓より本跡のほうが新しい。焼失家屋である。規模は東西5.6m、南北5.5mで隅が丸くなる正方形プランを呈する。掘り込みは約20cmでほぼ垂直に立ち上がる。床面は北東壁際が若干高くなるがほぼ平坦で、南東隅と北西隅付近を除く全面から炭化物・炭化材が検出された。ピットは５箇所である。Ｐ１は直径80cm、深さ14cm。Ｐ２は直径20cm、深さ14cm。Ｐ３は直径43cm、深さ14cm。Ｐ４は直径50cm、深さ20cm。Ｐ５は直径15cm、深さ15cmである。遺物は南側に多く分布するが、特に南西部は高密度である。南西部からは壺形土器と鉢形土器が出土し、他に器台形土器２点が完形で出土している。また、東壁際からも完形の器台形土器が出土している。



第６図　第１号住居跡遺物出土位置図



第７図　第１号住居跡出土遺物実測図

第1表　第1号住居跡出土遺物　(1)　(第7図)

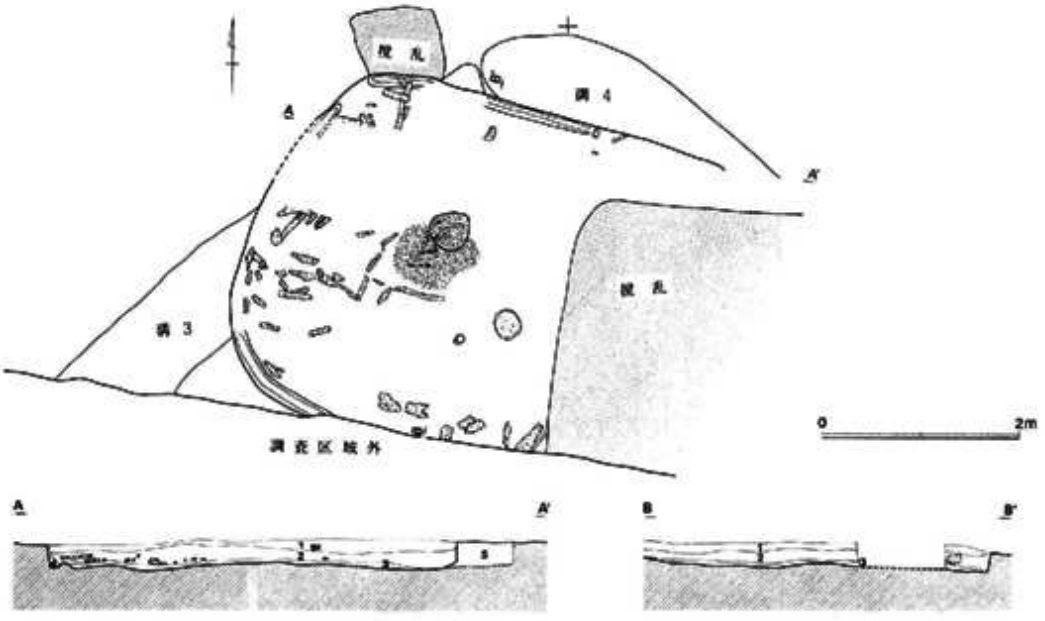
番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	口径　13.6 胴径　18.9 底径　5.4 器高　18.0	平底の底部から若干の丸味を持ちながら立ち上がる。胴部最大径を中位よりやや下に持つ。肩部の張りは弱い。頸部がほぼ直立し、口縁部は大きく外傾する。頸部内面に弱い稜を持つ。口縁部内外面ナデ調整、頸部外面の一部ヘラナデ。肩部内面、指頭圧痕あり。胴部外面はナデ調整後、ヘラ磨き。下半部は保存状態不良のため不明。内面、一部ヘラナデを行った後ナデ調整。胴部外面に18×11cm程の大きな黒斑あり。内面には輪積み痕が6段認められる。胴部の一部を欠損するが、ほぼ完存。	胎土　EH少、F微 AD若干 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
2	壺	底径　(7.0)	上げ底の底部、胴部下半は直線的に大きく開く。外面、ナデ調整後ヘラ磨き。内面、ナデ調整後刷毛目。底部、ヘラ削り後指によるナデ調整。胴下半部35%残。	胎土　E少、AH微 焼成　普通 色調　淡褐色	
3	壺	底径　(9.0)	外反気味に広がる胴部。内外面ともナデ調整。底部に木葉痕。胴下半部50%残。	胎土　AH微 焼成　良好 色調　淡橙褐色	
4	小型壺	底径　(4.4)	上げ底を呈する小型の底部。底部の器肉は、かなり厚手。外面、底部はナデ調整。立ち上がり部は指頭による押さえ。内面、ヘラナデ。胴下半部40%残。	胎土　E微 焼成　普通 色調　橙白色	
5	小型壺	口径　(10.2)	若干外反する口縁部。内外面とも横ナデ。外面に黒変する部分あり。内面の一部に煤付着。口縁部25%残。	胎土　E少 焼成　普通 色調　橙白色	
6	甕	口径　24.0 胴径　(24.6)	球形の胴部、頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部は緩やかに外反し、大きく開く。口径と胴部最大径の値は、ほぼ同じである。口縁部外面斜方向、内面横方向の刷毛整形後、上位を横ナデ。胴部外面、刷毛目。内面、ヘラナデ。外面全体に煤が付着。口縁部70%、胴部30%残。	胎土　G少、AEF微 焼成　良好 色調　暗茶褐色	
7	高　坏	口径　19.9	坏部下半に強い稜を持ち、口縁部は直線的に大きく開く。脚部接合部は外彎する。口縁部は横ナデと思われる。坏部、刷毛整形後ヘラ磨き。脚部外面、ヘラ磨き。坏部60%、脚部5%残。	胎土　AEH微 焼成　普通 色調　暗橙褐色	
8	高　坏	―――	若干内彎しながら開く坏部、下位に稜を持つ。脚部は直線的に開く。内外面ともナデ。坏部20%、脚部35%残	胎土　H少、A微 焼成　普通 色調　淡橙褐色	

第２表　第１号住居跡出土遺物　(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
9	高　坏	―――	外反しながら大きく開く脚部。円孔を３個有すると思われる。摩滅のため調整不明。脚部30%残。	胎土　Ｅ多、Ｄ若干 焼成　良好 色調　橙色	
１０	高　坏	―――	脚部は緩やかに外反する。３孔を有すると思われる。内外面ともナデ調整。脚部75%残。	胎土　ＥＨ微、Ａ若干 焼成　良好 色調　淡橙色	
１１	鉢	口径　11.0 胴径　13.3 底部　4.6 器高　11.5	底部は僅かに上げ底、胴部上半で大きく膨らむ。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部で若干内彎する。口唇部に平坦面をもつ。口縁部内外面、横ナデ。胴部ナデ調整。胴部外面約１/4が黒変。80%残。	胎土　ＥＨ微、Ａ若干 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
１２	器　台	口径　8.1 脚径　10.8 器高　8.3	受部は若干内彎する。貫通孔をもつ。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。脚部上位に円孔を２個有する。受部外面、斜方向のヘラ磨き。内面もヘラ磨きと思われる。脚部外面、刷毛整形後縦方向のヘラ磨き。内面、刷毛整形後ナデ。裾部の一部を欠損するが、完形。	胎土　Ｅ多、ＡＢ微 焼成　良好 色調　淡橙褐色	
１３	器　台	口径　7.3 脚径　9.5 器高　7.3	受部は浅く、貫通孔をもつ。脚部は緩やかに外反して開く。円孔は３ケ所。受部内外面、縦方向のヘラ磨き。脚部、ナデ調整。脚部内面に黒斑。完形。	胎土　Ｅ多、ＡＤ微 焼成　良好 色調　淡橙褐色	
１４	器　台	口径　(7.5) 脚径　(10.0) 器高　8.1	坏部は若干内彎して開きながら、口縁部で直立気味に立ち上がる。貫通孔をもつ。脚部は直線的で、裾部近くで屈曲し大きく開く。３孔を有す。脚部外面に刷毛目が若干残るが、後のナデ調整によって消されている。他の部分もナデ調整。外面と受部内面は赤彩。口縁部、裾端部を若干欠損するが、ほぼ完存。	胎土　Ｈ多、ＡＧ微 焼成　普通 色調　赤橙色	
１５	器　台	口径　(7.8)	大きく内彎する坏部、口縁部は直立する。受部は浅い。口縁部内・外面、横ナデ。坏部内面、ナデ調整後ヘラ磨き。受部20%残。	胎土　ＥＧ少 焼成　良好 色調　暗褐色	

第２号住居跡（第８・９図）

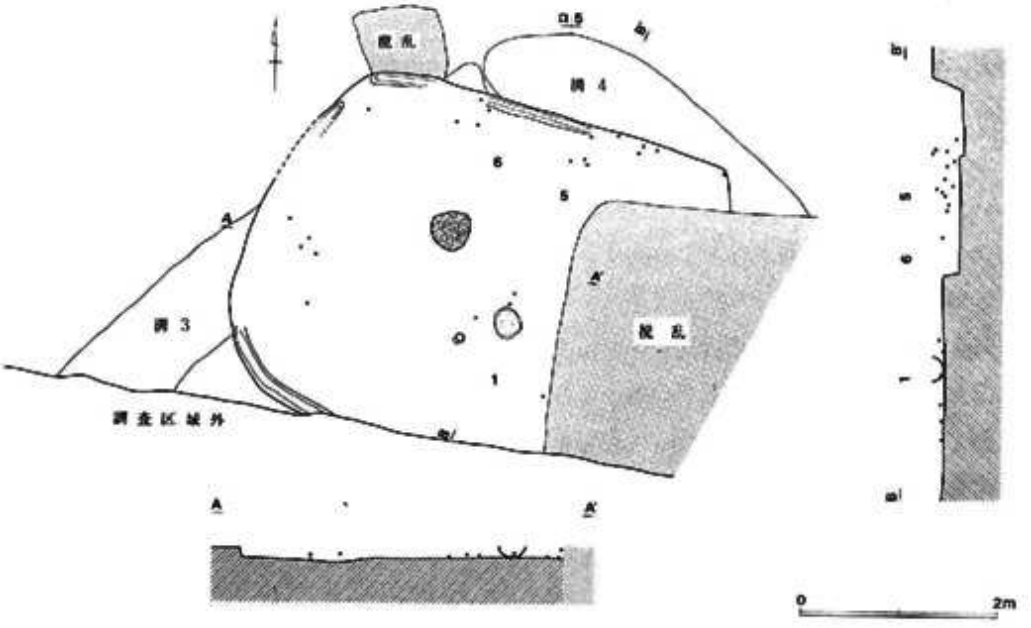
調査区の西側イ～ロ－５グリッドに位置する。住居跡南側一部が調査区域外となり、中央やや北側を東西に試掘調査のトレンチが設定され、南東部に大きく撹乱を受ける。第３号溝及び第４号溝と切り合って構築されているが、それらよりも新しい。焼失家屋である。規模は東西推定4.5m、南北推定4.0mを測る。形態は撹乱等により全容は不明であるが、隅が丸くなる長方形プランである。掘り込みは約15cmと浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また、部分的ではあるが、西壁と北壁際に幅15～20cm、深さ５cm程度の壁溝がめぐるようである。床面は中心部から西壁に向かって若干低くなるが、ほぼ平坦である。床面からは多量の炭化物が検出された。炉址は中央に１箇所である。掘り込みは約５cm程度と浅く、周囲に焼土が広がっている。ピットは認められなかった。遺物の量は比較的少ないが、北端の第４号溝と切り合う部分に渡って幾分集中している。中心部南東の床面から台付甕形土器が倒れた状態で出土している。



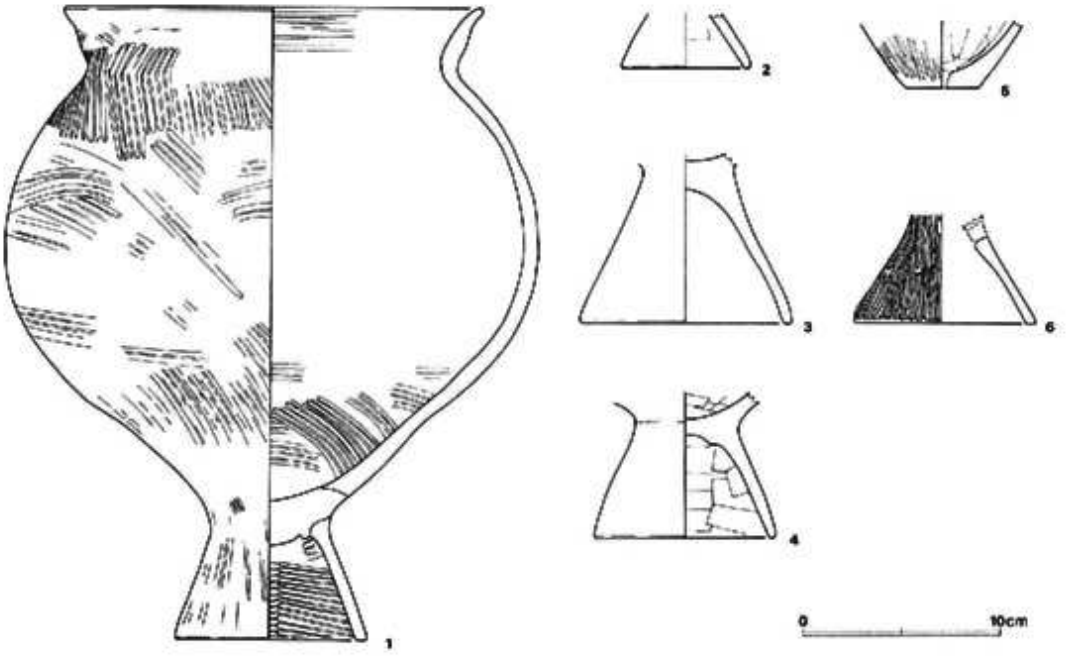
土層註

1. 明褐色土　黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性、しまりとも強い。
2. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性、しまりとも強い。
3. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子、同ブロックを多量に含む。粘性、しまりとも強い。
4. 黒褐色土　黄褐色粘土ブロックを含む。
5. 明褐色土　粘性弱く、しまりやや弱い。

第８図　第２号住居跡実測図



第9図　第2号住居跡遺物出土位置図



第10図　第2号住居跡出土遺物実測図

第３表　第２号住居跡出土遺物　（第10図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	台付甕	口径　(21.4) 胴形　(27.2) 脚形　(9.8) 器高　32.3	口縁部は真中がやや肥厚しながら直線的に開く。頸部は緩やかに屈曲し、肩部の張りは弱い。胴部中位に最大径を持ち、体部は比較的丸味がある。胴部下半は緩やかに外反しながら、接合部に至る。脚台部は内彎気味に開く。接合部分の器肉はかなり厚くなる。外面、胴下半部内面は幅約３㎜の太い刷毛整形後、簡単なナデを加える。口縁部内面も同じ工具による横方向の整形後ナデ。胴部内面、ナデ調整。脚台部内面は刷毛整形のみ。50％残。	胎土　Ｇ多、Ｈ少 焼成　良好 色調　淡茶褐色	
2	台付甕	脚径　(6.6)	内彎気味に開く、低く短かい脚部。内・外面とも器面状態不良のため調整不明。内面はナデと思われる。外面に煤が付着。脚台部25％残。	胎土　Ｆ少、Ｈ微 焼成　普通 色調　暗赤橙色	
3	台付甕	脚径　10.8	やや外反気味に開く、大型の脚台部。接合部外面に刷毛目が残るが、全体はナデ調整によって消されている。脚台部完存。	胎土　Ｆ少、ＡＨ微 焼成　良好 色調　橙色	
4	台付甕	脚径　9.2	やや内彎気味に広がる脚台部。外面はナデ調整。甕部底部・脚台部内面、木口状工具によるナデ。脚台部内面上位には横方向の指ナデ。外面・脚台部内面に煤が付着。脚台部完存。	胎土　ＧＨ少、Ａ微 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
5	小型壺	底径　(3.6)	底部は平底を呈する。胴下半部外面、太い刷毛整形後ナデ。内面、木口状工具によるナデ。底部25％残。	胎土　Ｇ少、Ｈ微 焼成　普通 色調　淡褐色	
6	高　杯	脚径　(9.2)	緩やかに外反しながら開く脚部。裾端部に平坦面をもつ。円孔は３個あると思われる。外面、ヘラ磨き。内面、ナデ調整。外面赤彩。脚部50％残。	胎土　ＥＨ少 焼成　やや不良 色調　暗赤褐色	

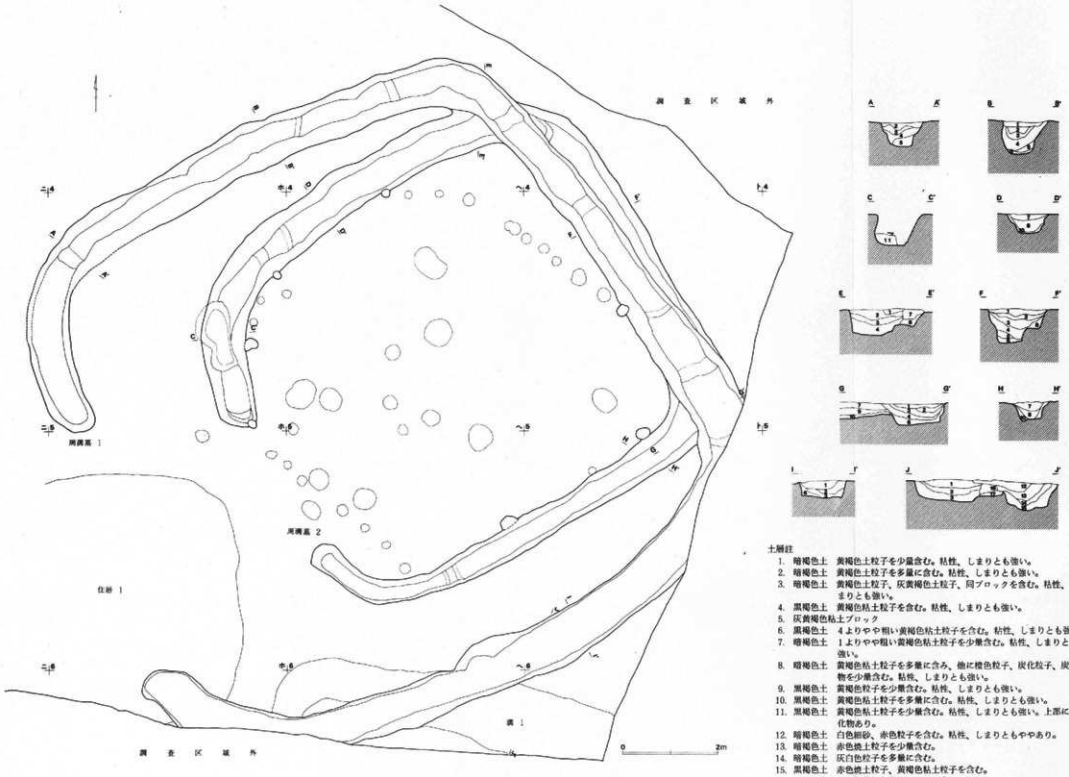
(2) 方形周溝墓と出土遺物

第1号方形周溝墓（第11・12・13・14図）

調査区の東側ハ～ヘ－3～6グリッドに位置する。東コーナーと南コーナーは調査区域外となる。第2号方形周溝墓を囲む様に構築される。北溝が第2号方形周溝墓と重複し、南コーナーでは第1号溝が巻く様に交差している。また、ブリッジにおいては第1号住居跡が、方台部には第2号方形周溝墓及びピットが存在する。新旧関係は、第2号方形周溝墓が最も古く、次に本跡、他はさらに新しい。形態は、南溝に幅5.2mのブリッジを形成するタイプである。北溝は直線的であるが、東・西溝が膨らみをもちブリッジに向かうにしたがって僅かに開く。南溝は「ハ」の字状に外側へ開く。規模は東西13.0m、南北13.0mで、ほぼ正方形プランである。溝幅は0.8～1.25m、深さは65～70cmを測る。但し、南溝は両側ともコーナー部分から緩やかに浅くなり20～30cm程の深さになる。掘り込みは急であるが、底面は比較的平坦である。北溝と西溝は各中央部付近で深くなる様子を示す。特に北溝は中央部でさらに一段深く掘り込んであり、また炭化物が底面直上から一点検出されている。遺物量は多く溝全体から出土しているが、特に北溝に集中する傾向がある。遺物は西溝北半と南溝西側から壺形土器が、北溝西半から台付甕形土器が、北西コーナーから鉢形土器が完形に近いかたちで出土している。

第2号方形周溝墓（第11・12・13・14図）

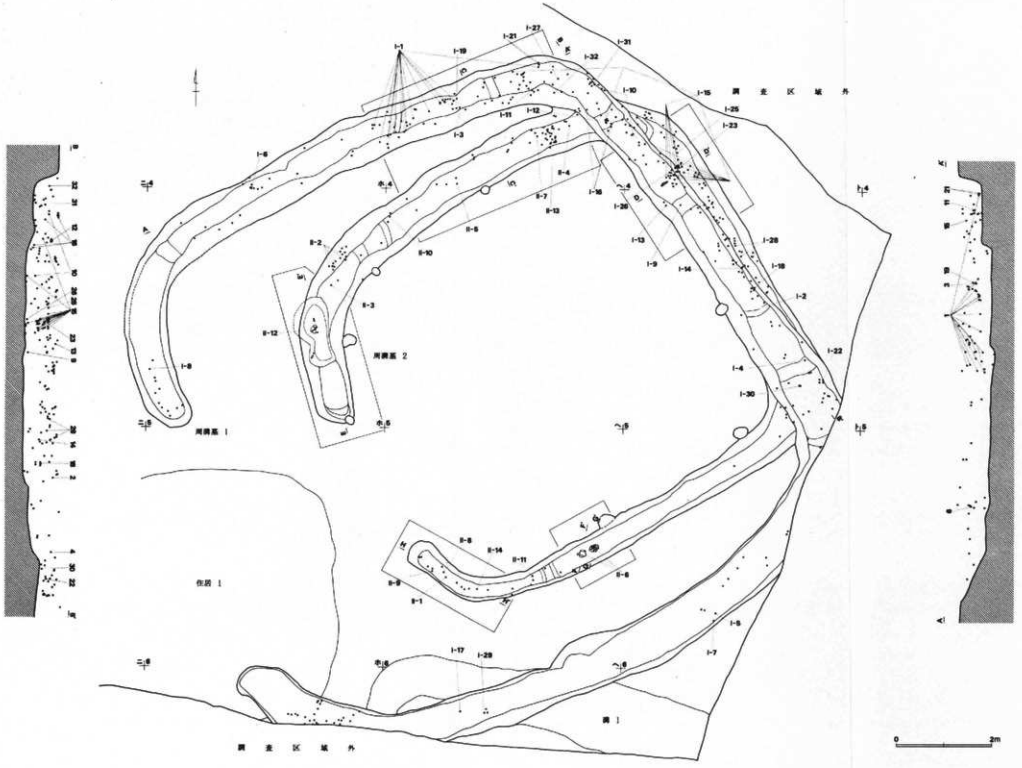
調査区の東側ニ～ヘ－3～5グリッドに位置する。北溝が第1号方形周溝墓に切られ、方台部にはピットが存在する。新旧関係は本跡が最も古い。形態は、南溝に幅2.9mのブリッジを形成するタイプである。北溝は直線的に第1号方形周溝墓と重なり合うが若干のずれがある。東溝は直線的であるが、西溝はやや膨らみをもちながら南溝に向かう。南溝は「ハ」の字状に外側へ開く。規模は東西8.7m、南北8.8mで、ほぼ正方形プランである。溝幅は0.5～1.0m、深さは30～40cmを測る。西溝に比較し東溝は幅が狭くなる。底面は比較的平坦である。南・西溝を結ぶコーナーには底面が一段深く掘り込まれ、さらに側面が僅かにオーバーハングする土壙状の掘り込みをもつ。大きさは長辺1.50m、短辺0.5～0.8mを測り、平面的には中程が凹む形態である。ここからは炭化物や焼土が底面から約20cm程のところに少量ながら検出され、さらにその上から高坏が伏せたような状態で出土している。遺物の分布は全体的に広がる様子を示すが、特に第1号方形周溝墓と重複する北溝が著しい。他に南溝から両側コーナーにかけてが濃い分布を示す。遺物は南東コーナーからは壺形土器が、東溝南寄りからは台付甕形土器がそれぞれ完形に近いかたちで出土している。



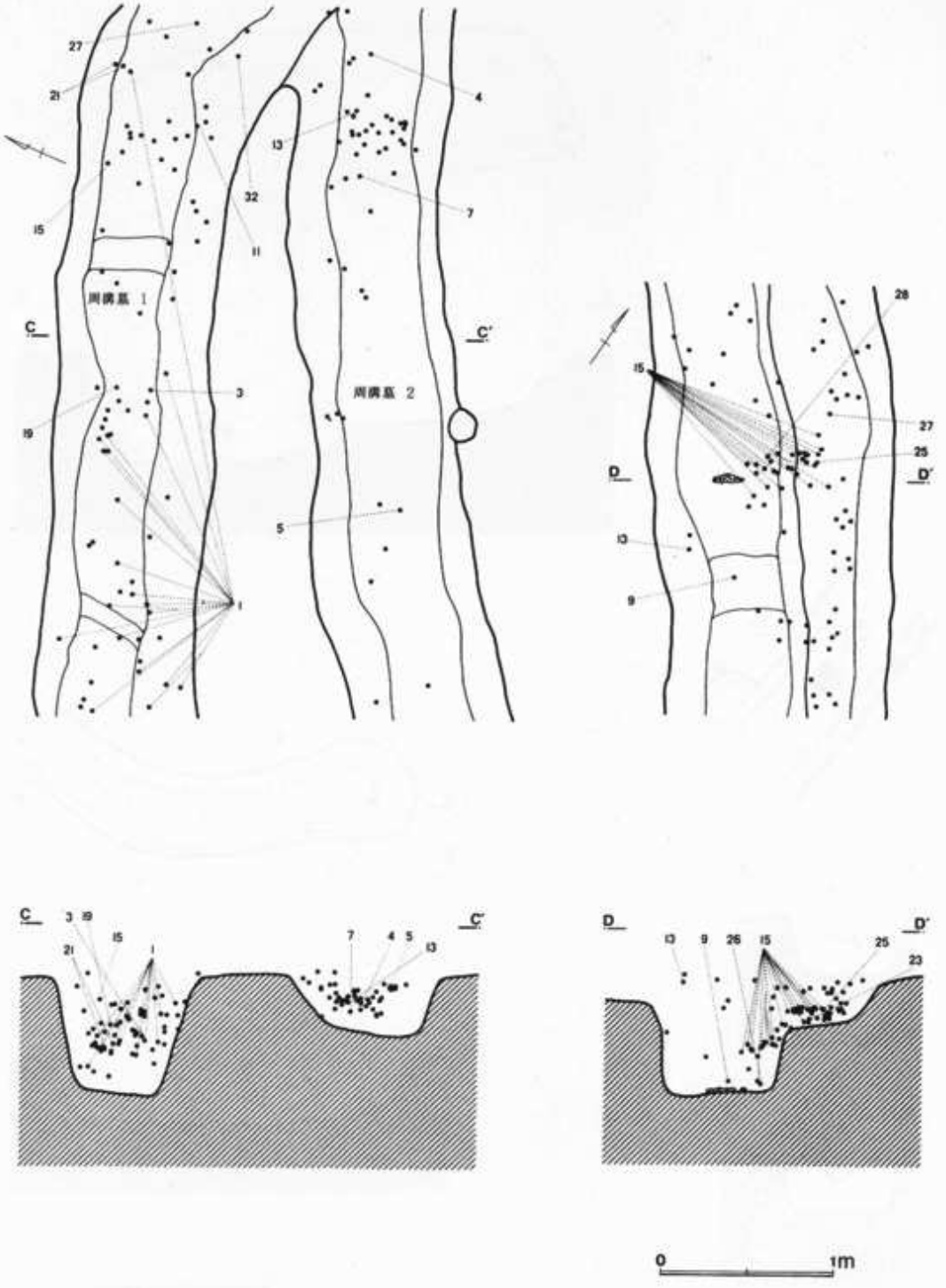
土層註

1. 暗褐色土　黄褐色土粒子を少量含む。粘性、しまりとも強い。
2. 暗褐色土　黄褐色土粒子を多量に含む。粘性、しまりとも強い。
3. 暗褐色土　黄褐色土粒子、灰黄褐色土粒子、同ブロックを含む。粘性、しまりとも強い。
4. 黒褐色土　黄褐色粘土粒子を含む。粘性、しまりとも強い。
5. 灰黄褐色粘土ブロック
6. 黒褐色土　4よりやや粗い黄褐色粘土粒子を含む。粘性、しまりとも強い。
7. 暗褐色土　1よりやや粗い黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、しまりとも強い。
8. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子を多量に含み、他に橙色粒子、炭化粒子、炭火物を少量含む。粘性、しまりとも強い。
9. 黒褐色土　黄褐色粒子を少量含む。粘性、しまりとも強い。
10. 黒褐色土　黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性、しまりとも強い。
11. 黒褐色土　黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、しまりとも強い。上部に炭化物あり。
12. 暗褐色土　白色細砂、赤色粒子を含む。粘性、しまりともややあり。
13. 暗褐色土　赤色焼土粒子を少量含む。
14. 暗褐色土　灰白色粒子を多量に含む。
15. 黒褐色土　赤色焼土粒子、黄褐色粘土粒子を含む。
16. 暗褐色土　下部に黄褐色土ブロックを含む。
17. 黒褐色土　黄褐色粘土粒子を少量含む。

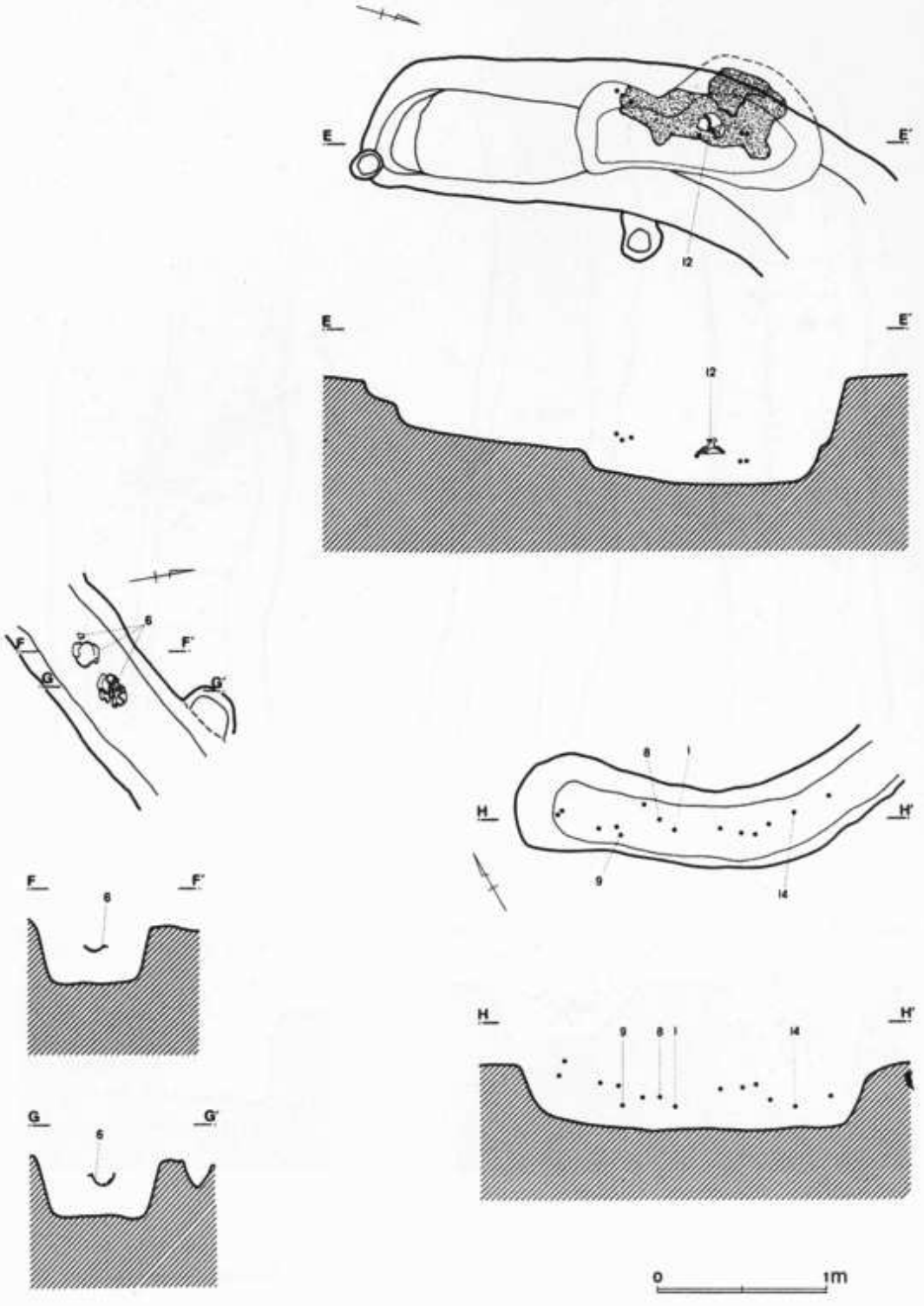
第11図　第1・2号方形周溝墓実測図



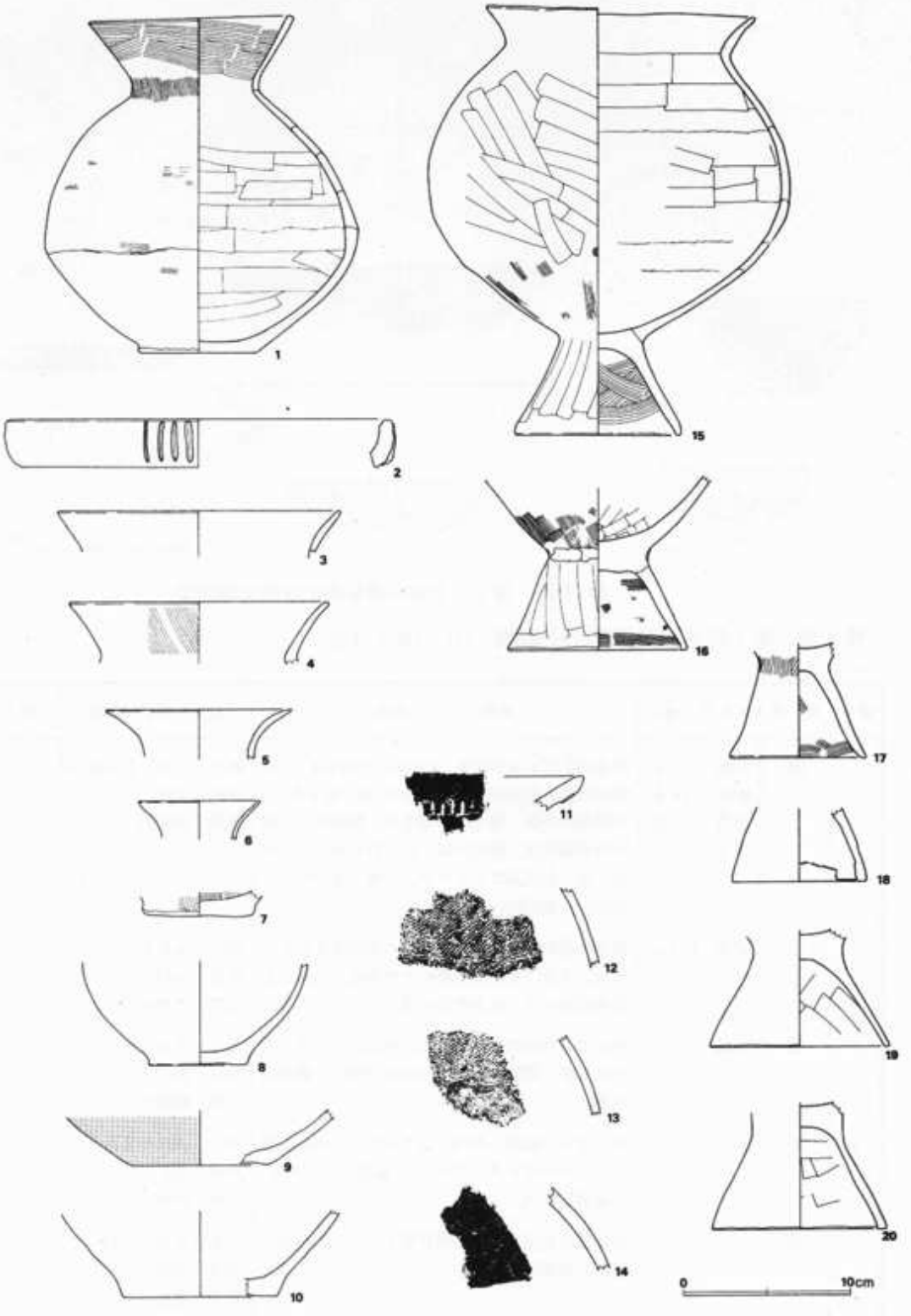
第12図　第1・2号方形周溝墓遺物出土位置図(1)



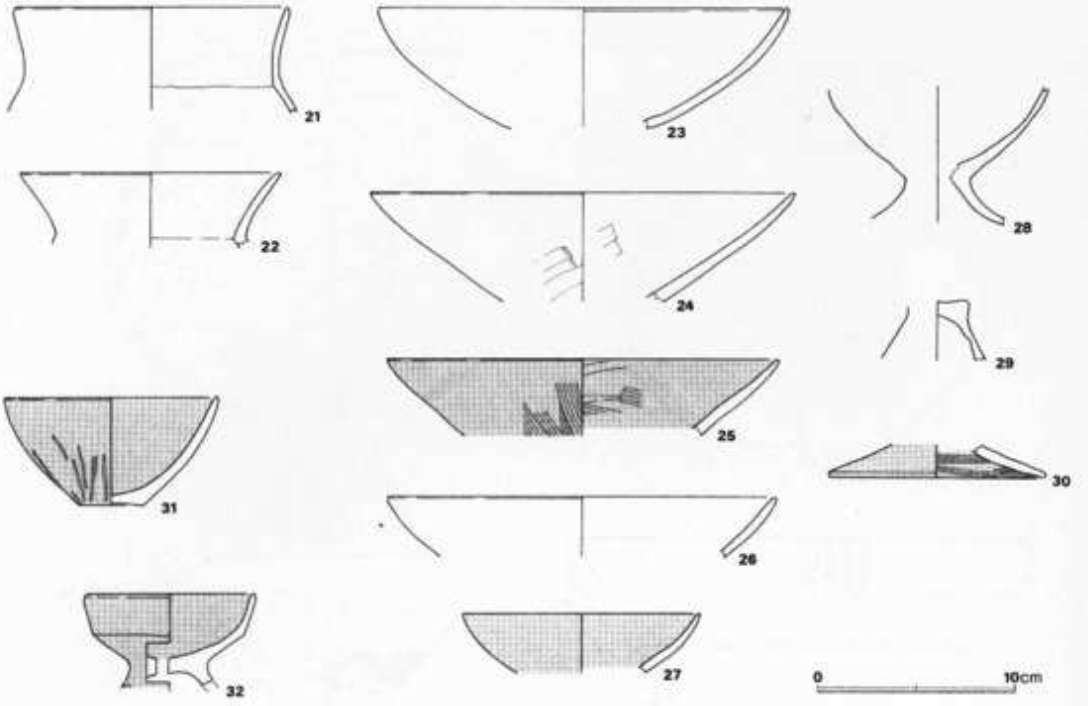
第13図　第1・2号方形周溝墓遺物出土位置図(2)



第14図　第1・2号方形周溝墓遺物出土位置図(3)



第15図　第1号方形周溝墓出土遺物実測図(1)



第16図　第1号方形周溝墓出土遺物実測図(2)

第4表　第1号方形周溝墓出土遺物　(1)　(第15・16図)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	口径　12.4 胴径　18.9 底径　7.2 器高　20.4	直線的に広がる口縁部、口唇部に平坦面をもつ。胴部は最大径がやや下位にあり、弱い稜をもつ。口縁部内外面、横方向の刷毛目。頸部外面、縦方向の刷毛目。胴部外面、刷毛整形後ナデ。内面、木口状工具によるナデ。外面に煤が付着。底部には籾圧痕。70%残。	胎土　G多、EH微 焼成　良好 色調　淡褐色	
2	壺	口径　(13.4)	複合口縁の複合部。4本以上の棒状浮文を貼付する。外面、刷毛整形後にナデ調整。内面、刷毛整形後ナデ。複合部20%残。	胎土　ACFH 焼成　良好 色調　黄橙色	
3	壺	口径　(17.2)	外反する口縁部。口縁部内、外面ともナデと思われるが、器面状態不良のため不明。口縁部10%残。	胎土　ABCEF 焼成　良好 色調　暗橙色	
4	壺	口径　(15.6)	外反する口縁部。外面、刷毛目後、口唇部に横ナデ。内面はナデと思われる。頸部以下は不明。口縁部10%残。	胎土　ABCEF 焼成　良好 色調　暗橙色	
5	壺	口径　(11.2)	口縁部は外反する。器面状態不良につき調整不明。口縁部30%残。	胎土　ABCEH 焼成　良好 色調　橙色	
6	壺	口径　(7.4)	口縁部は外反する。器壁は薄い。器面状態不良のため調整不明。口縁部10%残。	胎土　ABCEH 焼成　良好 色調　橙色	

第５表　第１号方形周溝墓出土遺物　(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
7	壺	底径　(6.4)	平底の底部。外面、刷毛整形後ナデ。内面、木口状工具によるナデ。底面、木口状工具によるナデの後、ナデを行なったと思われる。底部完存。外面赤彩。	胎土　ＡＢＣＥＨ 焼成　良好 色調　赤褐色	
8	壺	底径　5.9	球形の胴部で、底部は僅かな上げ底を呈する。内外面ともナデ調整。胴下半部75％残。	胎土　Ｅ多、ＡＢＨ微 焼成　やや不良 色調　淡赤橙色	
9	壺	底径　(8.2)	底部から緩やかに内彎する胴下半部。底部は若干上げ底状を呈する。胴部内外面ともナデ調整。底面は木口状工具によるナデ。胴下半部10％残。	胎土　ＡＢＣＥＦ 焼成　良好 色調　暗赤褐色	
10	壺	底径　(9.2)	底部から緩やかに内彎する胴下半部。器面保存状態不良のため詳細は不明であるが、外面、木口状工具によるナデの後ナデを行なったと思われる。内面、ナデ調整。胴下半部20％残。	胎土　ＡＢＣＥＦＨ 焼成　良好 色調　灰白色	
11	壺	―――	口縁部の破片。複合口縁を呈する。複合部下端に刻み目。外面、ナデ調整。内面、ヘラ磨き。内外面赤彩。	胎土　Ｇ多 焼成　良好 色調　淡褐色	
12	壺	―――	肩部の破片。ＬＲの斜縄文を施す。その下には１条のＳ字状結節文が廻る。内面、ナデ調整。外面無文帯に赤彩。	胎土　ＧＨ少、Ｆ微 焼成　やや不良 色調　淡赤色	
13	壺	―――	上と同一個体。		
14	壺	―――	肩部の破片。外面上位にＲＬ、ＬＲ縄文を施すことにより羽状縄文を呈する。その下には１条のＳ字状結節文で区画する。胴部外面、刷毛整形後ナデ。内面ナデ。外面無文帯に赤彩。	胎土　Ｅ少 焼成　良好 色調　灰白色	
15	台付甕	口径　16.2 胴径　21.7 脚径　10.0 器高　25.7	口縁部はほぼ直線的に開き、頸部は緩やかに屈曲する。最大径を胴部中位にもち、球状を呈する。脚台部は直線的に広がる。口縁部内外面、ナデ調整。胴部外面、刷毛目後ヘラナデ。内面、木口状工具によるナデの後ナデ調整。脚台部外面、ヘラナデ後ナデ調整。内面、刷毛目。内外面に若干の煤が付着。70％残。脚台部ほぼ完存。	胎土　ＦＨ微、Ａ若干 焼成　普通 色調　淡赤橙色	
16	台付甕	脚径　10.8	脚台部はほぼ直線的に開き、甕部は緩やかに立ち上がる。接合部分に粘土を貼付し補強してある。脚部外面、ヘラ削り後ナデ調整。内面、横方向の刷毛整形後ナデ調整。胴下半部外面、刷毛目。内面、木口状工具によるナデの後ナデ調整。胴下半部30％残。脚台部完存。	胎土　ＦＧ少、Ｈ微 焼成　普通 色調　暗茶褐色	

第6表　第1号方形周溝墓出土遺物 (3)

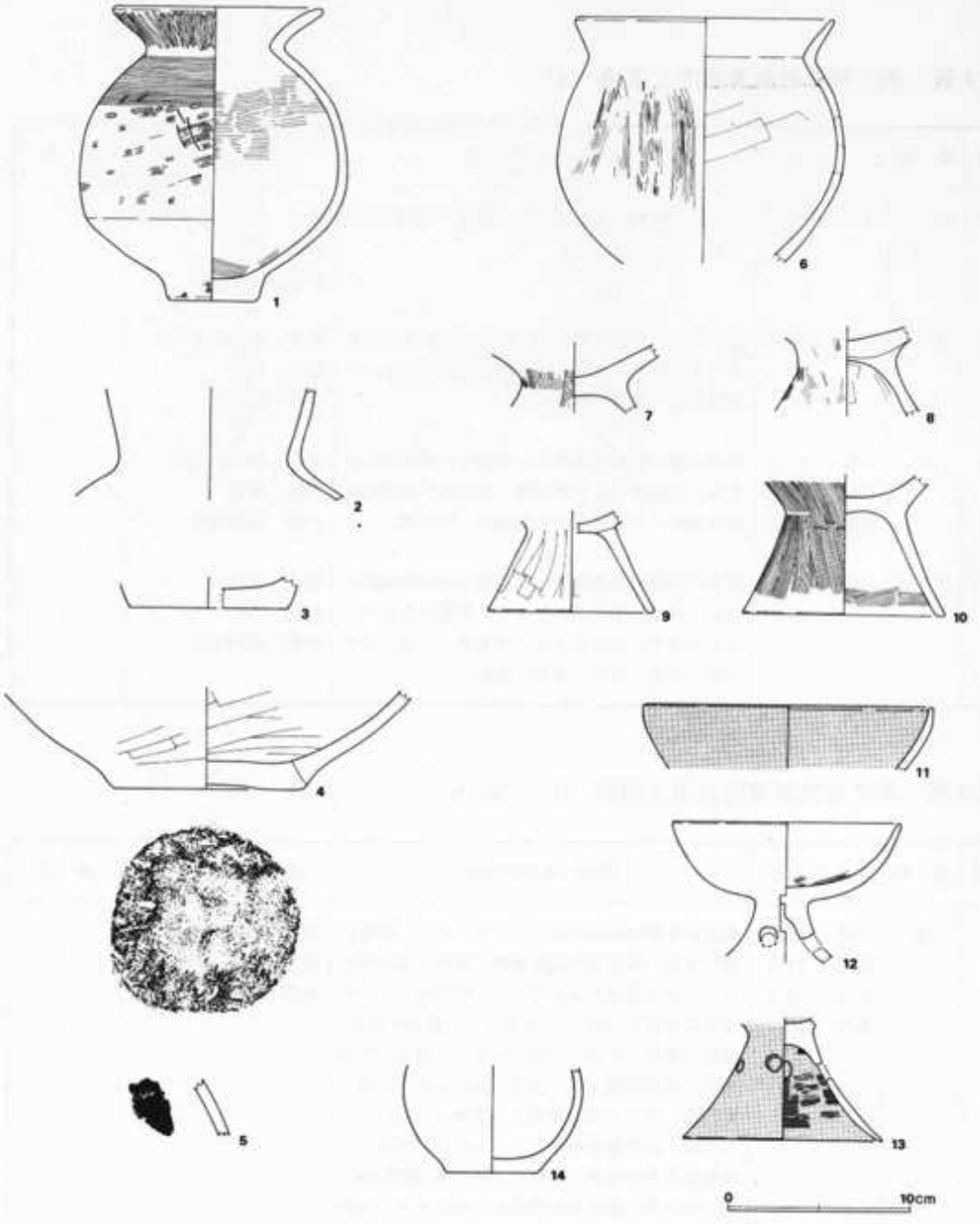
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
17	台付甕	脚径　8.3	外反気味に開く脚台部。内外面、刷毛整形後ナデ調整。脚端部を一部欠くが、ほぼ完存。	胎土　F多、EG少 焼成　良好 色調　淡赤橙色	
18	台付甕	脚径　(8.0)	緩やかに内彎する脚台部。裾部内面の一部に折り返し。2次的火熱を受け、内外面とも器面剥落し、赤く変色している。そのため内外面とも調整不明。脚台部20%残。	胎土　AH 焼成　良好 色調　淡橙色	
19	台付甕	脚径　10.8	ほぼ直線的に開く脚台部。外面、一部ヘラ削り後ナデ。内面、木口状工具によるナデ後丁寧なナデ。内面に煤付着。脚台部完存。	胎土　F少、AE微 焼成　良好 色調　赤橙色	
20	台付甕	脚径　10.5	内彎気味に開く脚台部、接合部は直立する。外面、一部ヘラ削り後ナデ調整。内面、木口状工具によるナデの後ナデ調整。内外面に煤付着。脚台部完存。	胎土　G多 焼成　普通 色調　赤橙色	
21	甕	口径　(14.2)	頸部から「く」の字状に外反する口縁部。口縁部内・外面共刷毛目後横ナデ。頸部以下外面、刷毛整形後ナデ調整。内面、ナデ。2次的火熱を受け、外面に赤変する部分あり。口縁部10%残。	胎土　ABCEH 焼成　良好 色調　黒色	
22	甕	口径　(13.4)	頸部から「く」の字状に外反する口縁部。口縁部外面、刷毛目後横ナデ。内面、器面状態不良のため調整不明。口縁部10%残。	胎土　ABCEFH 焼成　良好 色調　黄橙色	
23	高　坏	口径　(20.8)	内彎する坏部。口縁部内外面、横ナデ。坏部内外面はナデ調整と思われる。坏部30%残。	胎土　ABCEFH 焼成　内面一部不良 色調　黄白色	
24	高　坏	口径　(21.6)	直線的に開く坏部。内外面、木口状工具によるナデ。外面に黒斑あり。坏部10%残。	胎土　ABCEFH 焼成　良好 色調　淡橙色	へ－5グリッド出土
25	高　坏	口径　(20.0)	直線的に開く坏部。内外面ともに刷毛整形後、口縁部横ナデ。内外面赤彩。坏部10%残。	胎土　ABCEFH 焼成　良好 色調　赤色	
26	高　坏	口径　(19.8)	若干内彎して開く坏部。木口状工具によるナデを行った後、内外面横ナデ。坏部10%残。	胎土　ABCEFH 焼成　良好 色調　暗黄橙色	
27	高　坏	口径　(12.0)	内彎して開く坏部。内外面ともナデ調整。内外面赤彩。坏部10%残。	胎土　ABFH 焼成　良好 色調　赤色	
28	高　坏	――	坏部は接合部から若干内彎して立ち上がる。脚部は大きく外反して開く。製作法は不明。内外面とも器面状態不良につき調整不明。坏部10%、接合部50%、脚部10%残。	胎土　ABCEFH 焼成　良好 色調　赤橙色	

第7表　第1号方形周溝墓出土遺物　(4)

番号	器種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
29	高杯	―――	脚部。内外面とも剝落著しく調整不明。脚部20%残。	胎土　ABCEFH 焼成　良好 色調　暗黄橙色	
30	高杯	脚径　(11.2)	若干外反して広がる裾部。裾部内面、木口状工具によるナデ。外面、ヘラ磨きと思われる。内外面赤彩。裾部10%残。	胎土　ABCEFH 焼成　良好 色調　黄白色	
31	鉢	口径　(11.0) 底径　(3.4) 器高　(6.5)	体部は緩やかに内彎する。底部は上げ底状を呈する。内外面ともナデ調整。その後、外面のみ部分的にヘラ磨き。内外面赤彩。50%残。	胎土　E少、H微 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
32	器台	口径　8.8	杯部は内彎気味に開き、口縁部でほぼ直線的に立ち上がる。中心から左よりに貫通孔をもつ。2孔を有す。内外面ともナデ調整。外面、受部内面に赤彩。外面に黒斑。受部完存。	胎土　GH少 焼成　良好 色調　淡橙褐色	

第8表　第2号方形周溝墓出土遺物　(1)　(第17図)

番号	器種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径　(11.6) 胴径　14.8 底径　5.2 器高　16.3	底部から緩やかに内彎して立ち上がり、胴部へ移行する。胴部下半は直線的に開き、弱い稜をもつ。上半部は丸味を帯びる。頸部は「く」の字状に屈曲し、直線的に外傾する口縁部に至る。単純口縁を呈する。口縁部外面ヘラ磨き、内面ナデ。外面胴部上半、櫛状工具による平行線文が巡る。その下には刺突文が認められる。中位以下は、刷毛整形後ナデ。下半にはヘラ磨きの痕跡が見られるが、摩滅のため不明。胴部内面、部分的に粗い刷毛目が残るが、他はナデ。内面に微量の煤が付着。70%残。底部完存。	胎土　H多、AF微 焼成　普通 色調　淡黄橙色	
2	壺	―――	頸部はやや外彎して曲がり、直線的に開く口縁部に至る。摩滅のため調整不明。60%残。	胎土　G多、EF微 焼成　やや不良 色調　橙色	
3	壺	底径　(8.8)	平底の底部。内外面ともナデ調整。底部20%残。	胎土　G少、AEH微 焼成　普通 色調　暗茶褐色	



第17図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図

第９表　第２号方形周溝墓出土遺物　(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
4	壺	底径　10.5	上げ底状を呈する大型の底部。胴部下半は若干の丸味を持ちながら立ち上がる。胴部外面ヘラ削り後ナデ調整、赤彩。内面、ヘラナデ後ナデ調整。底部ナデ調整、木葉痕。胴部下半40％残、底部完存。	胎土　E少、AH微 焼成　普通 色調　淡橙褐色	

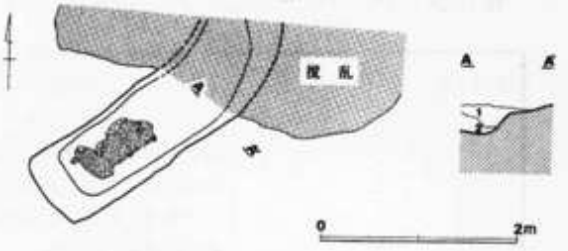
第10表　第２号方形周溝墓出土遺物　(3)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
5	壺	―――	肩部の破片。下部に１条のＳ字状結節文が施された上にＬＲの斜縄文が施文されている。外面ヘラ磨き、内面ナデ。文様施文部分を除いた外面には赤彩。	胎土　Ｇ少、 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
6	台付甕	口径　14.3 胴径　15.8	胴部はほぼ球形で、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。口縁部内外面横方向のナデ調整。胴部外面ナデ調整後、木口状工具と思われる工具により縦方向のナデが４ケ所に認められる。内面、木口状工具によるナデの後ナデ調整。外面は全体的に煤が付着し、黒変。内面に輪積み痕が認められる。80％残。	胎土　ＦＨ微 焼成　やや不良 色調　暗茶褐色	
7	台付甕	―――	小さく外彎する接合部。接合部に刷毛目を残すが、他はナデ調整。接合部90％残。	胎土　Ｈ少 焼成　良好 色調　橙褐色	
8	台付甕	―――	大きく「ハ」の字状に開く脚台部。外面、刷毛整形後ナデ。甕部底部、ナデ調整。脚台部内面木口状工具によるナデの後ナデ調整。50％残。	胎土　Ｇ多、ＡＦＨ微 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
9	台付甕	脚径　9.2	直線的に開く脚台部。脚台部外面、ヘラナデ後端部にナデを加える。内面、ヘラナデ後ナデ。甕部底部、ナデ調整。内外面とも煤が付着する。脚台部ほぼ完存。	胎土　Ｅ少、Ｈ微 焼成　普通 色調　赤橙色	
１０	台付甕	脚径　(11.2)	やや外反気味に開く脚台部。外面、ナデ調整後縦方向の刷毛目。甕部底部、木口状工具によるナデの後ナデ調整。脚台部内面ナデ調整後、端部付近に横方向の刷毛目。脚台部50％残。	胎土　Ｈ微、Ａ若干 焼成　良好 色調　淡茶褐色	
１１	高　坏	口径　(16.0)	内彎気味に開く坏部、口縁部で直立気味となる。口唇部内面に弱い稜をもつ。内外面ともナデ調整、赤彩。坏部10％残。	胎土　Ｇ少　Ｈ微 焼成　普通 色調　赤褐色	
１２	高　坏	口径　12.6	内彎して立ち上がる坏部。脚部は外反して開く。円孔は３個。坏部外面は保存状態不良のため調整不明。内面、粗い刷毛整形後に丁寧なナデ調整。脚部、ナデ調整。内外面とも若干煤けている。70％残。	胎土　Ｈ微、Ａ若干 焼成　普通 色調　淡灰褐色	
１３	高　坏	口径　(11.0)	脚部は外反気味に開き、裾部で緩やかに広がる。４孔を有する。外面は器面状態不良のため調整不明。脚部内面、横方向の刷毛目。坏部底部・裾部内面、ナデ調整。内外面とも赤彩。脚部50％残。	胎土　Ｈ少、ＡＥ微 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
１４	高　坏	胴径　(9.8) 底径　5.1	胴部は球形を呈する。胴部外面、ヘラ削り後ナデ。内面、ナデ調整。50％残。底部完存。	胎土　ＥＦＨ微 焼成　やや不良 色調　黒褐色	

(3) 土壙と出土遺物

第1号土壙（第18・19図）

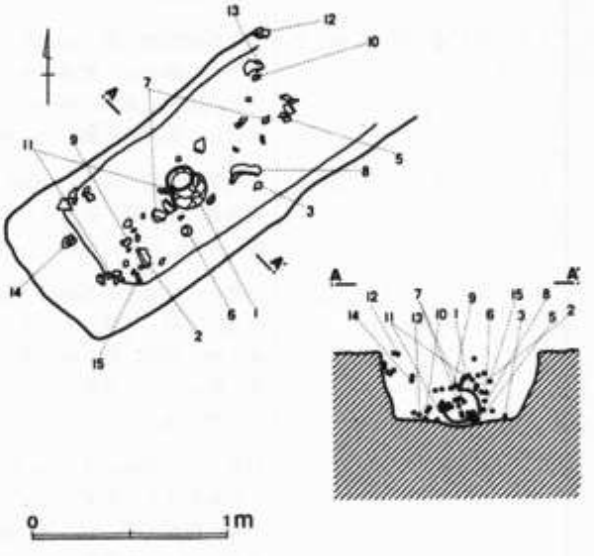
調査区の北西部分ハー3グリッドに位置する。北側にはコンクリートの攪乱を挟んで第2号溝が存在する。一見すると同一遺構のようにも見えるが、本跡は攪乱の下部で立ち上がり、北壁となる様相を呈す。形態は攪乱を受けるため全容は不明であるが長方形と推察される。壁は南壁が緩やかに立ち上がる他は垂直に近い。底面は若干高低差をもつが、ほぼ平坦である。規模は、長径推定2.8m、短径0.8m、深さ35cmを測る。遺物は、南半分の下層に集中し、全体にわたって出土ている。中央から広口壺形土器が、接近して小型壺形土器が出土している。他は小破片のみである。



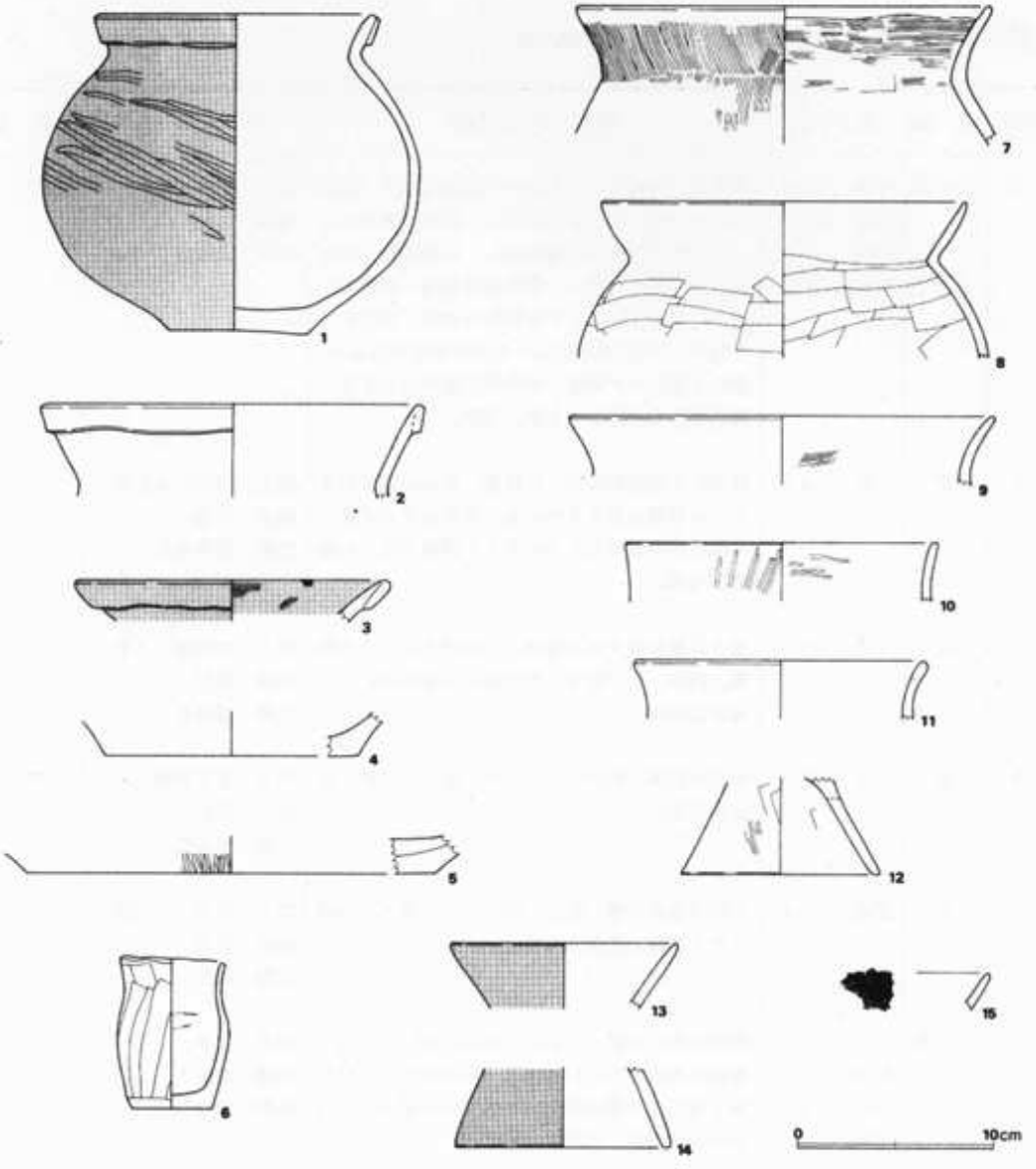
土層註

1. 暗褐色土　橙色粒子をやや多量に含む。粘性、しまりとも強い。
2. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子、橙色粒子を少量含む。粘性、しまりとも強い。

第18図　第1号土壙実測図



第19図　第1号土壙遺物出土位置図



第20図　第1号土壙出土遺物実測図

第11表　第1号土壙出土遺物 (1)　(第20図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	広口壺	口径 14.6 胴径 19.3 底径 7.1 器高 16.2	底部から内彎して立ち上がる球形の胴部。頸部は「く」の字状に弱く屈曲し、肩部の張りは弱い。口縁部は複合口縁を呈し、口唇部には外を向く平坦面を有する。器表面は剥落・摩滅している。外面全体にナデを行なった後、胴部にヘラ磨き。内面、部分的にヘラナデが見られるが、後に丁寧なナデ調整。内外面に煤が付着する。底部を除く外面には赤彩。完形。	胎土　EFH微 焼成　良好 色調　淡褐色	
2	壺	口径 (19.8)	頸部から直線的に開く口縁部。複合口縁を呈する。口唇部は若干丸味をもつ平坦面を有する。器面状態不良のため内外面とも調整不明。口縁部20%残。	胎土　G多、AE微 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
3	壺	口径 (16.2)	複合口縁を呈する口縁部。口縁部外面、ナデ調整。内面、ヘラ磨き。内外面とも全面赤彩。口縁部10%残。	胎土　GH微、A若干 焼成　良好 色調　橙褐色	
4	壺	底径 (13.0)	平底の底部。内外面、ヘラナデ後ナデ調整。底部10%残。	胎土　EFH微 焼成　良好 色調　暗褐色	
5	壺	底径 (20.8)	大型で器肉の厚い底部。外面、ヘラ磨き。内面はナデ調整。底部5%残。	胎土　G多、EH微 焼成　普通 色調　褐色	
6	小型壺	口径 5.4 胴径 5.7 底径 4.0 器高 7.7	胴部の張りは弱く、頸部の屈曲も弱い。口縁は僅かに外反する。口唇部に平坦面をもち、やや外を向く。外面は縦方向のヘラナデ後ナデ。内面はナデ調整。完形。	胎土　E多、F少 焼成　良好 色調　淡茶褐色	
7	甕	口径 (21.4)	緩やかに外反する口縁部。口縁部上位は横方向のナデ。内面はそれにより若干の段をもつ。口縁部・胴部外面、斜位の刷毛目整形で、胴部のみ刷毛を一部ナデ消す。口縁部内面、横方向の刷毛目後ナデ。胴部内面、ナデ調整。口縁部20%残。	胎土　EH微 焼成　良好 色調　暗茶褐色	
8	甕	口径 (18.8)	内彎気味に広がる口縁部。頸部は「く」の字状に屈曲し、肩部の張りは弱い。口縁部内外面、ナデ調整。胴部は木口状工具によるナデの後ナデ調整。内面は、くびれ部のぎりぎりまで整形を行なう。口縁部内面に煤が付着。口縁部25%残。	胎土　EH少、AF微 焼成　良好 色調　暗茶褐色	

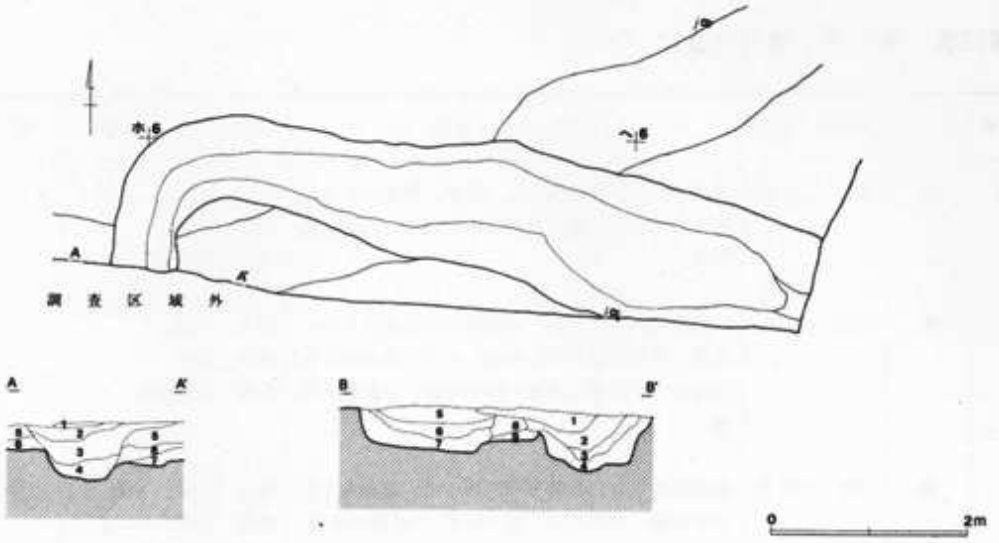
第12表　第１号土壙出土遺物　(2)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
9	甕	口径　(21.8)	口縁部は短かく外反する。外面、摩滅のため調整不明。内面、刷毛整形後ナデ調整。口縁部10％残。	胎土　EH微、A若干 焼成　普通 色調　暗茶褐色	
10	甕	口径　(16.0)	口縁部はほぼ直立し、口唇部に平坦面をもつ。外面、刷毛目後ナデ。内面、ナデ。部分的に横方向のヘラ磨き。外面に煤が付着。口縁部７％残。	胎土　H微、 焼成　良好 色調　暗茶褐色	
11	甕	口径　(15.0)	頸部が直立し、口縁部は外傾する。内外面ともナデ調整。内面に若干煤が付着。口縁部10％残。	胎土　H少、A微 焼成　良好 色調　淡赤橙色	
12	台付甕	脚径　(10.2)	「ハ」の字状に開く脚台部。外面、刷毛目及びヘラナデの後ナデ調整。内面、ナデ調整。脚台部20％残。	胎土　H微 焼成　普通 色調　淡赤褐色	
13	高　杯	口径　(11.6)	口縁部はほぼ直線的に開き、口唇部の近くで若干内彎する。器面状態不良のため調整不明であるが、ナデを行ったと思われる。外面に赤彩。口縁部15％残。	胎土　G多、AH微 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
14	高　杯	脚径　(11.0)	やや内彎して広がる脚部。内外面ともナデ。外面に赤彩。脚部40％残。	胎土　AFH微 焼成　良好 色調　褐色	
15	高　杯	―――	口縁部の破片。外面、刷毛整形後ナデ。内面、LRの斜縄文。外面赤彩。口縁部６％残。	胎土　FH微 焼成　良好 色調　赤褐色	

(4)　溝と出土遺物

第１号溝（第21・22・23図）

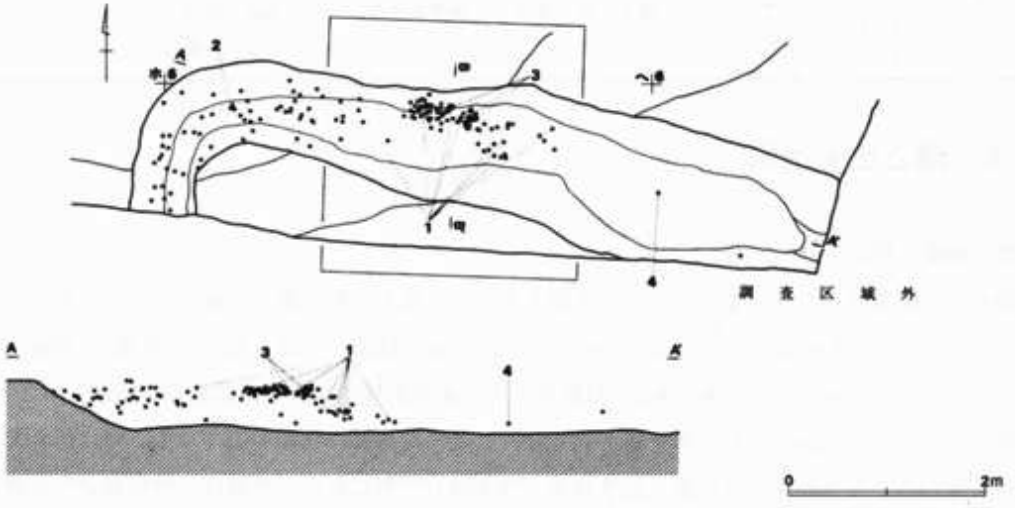
調査区の南東隅ニ～ヘ－６グリッドに位置する。東・南の両側が調査区域外となる。北西コーナー部分で第１号方形周溝墓と交差するように切り合う。新旧関係は本跡が新しい。形態は、両端が調査区域外となるため全容は不明であるが、その掘り方の形態や規模から方形周溝墓の可能性も考えられる。北溝は東から西へ向かうにしたがい幅が狭くなり、さらに西溝は極端に細くなる。壁は傾斜をもちながら緩やかに立ち上がるように掘り込まれる。底面はU字形に近い。規模は、検出部分で北溝7.0m、西溝1.4m、深さ60cmを測る。遺物は第１号方形周溝墓と交差する北西コーナーに集中する。しかも上層部に多い。中央の集中部分からは壺形土器が、東側下層から坩形土器がそれぞれ出土している。



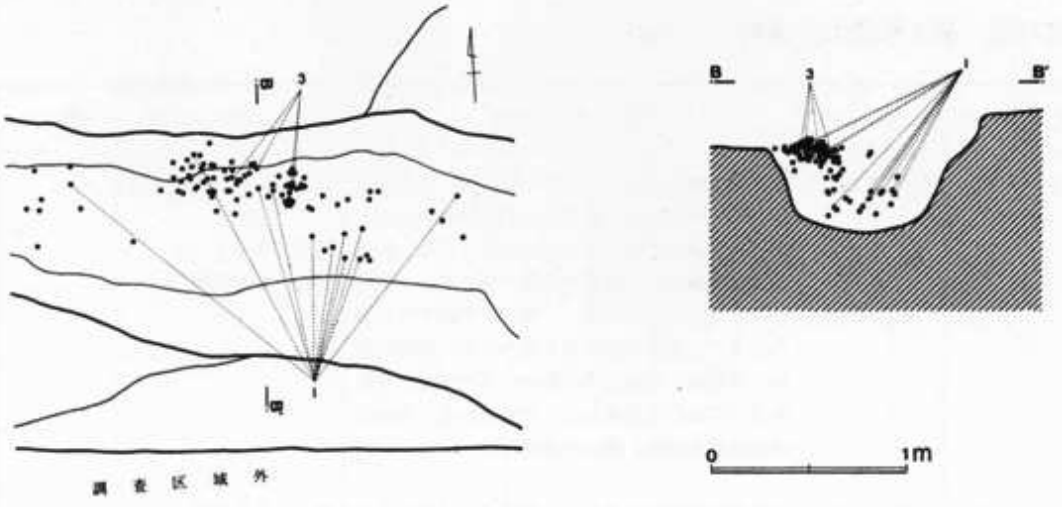
土層註

1. 暗褐色土　白色細砂、赤色粒子を含む。粘性、しまりともややあり。
2. 暗褐色土　赤色焼土粒子を少量含む。
3. 暗褐色土　灰白色粒子を多量に含む。
4. 黒褐色土　赤色焼土粒子、黄褐色粘土粒子を含む。
5. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、しまりとも強い。
6. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性、しまりとも強い。
7. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子、同ブロックを多量に含む。粘性、しまりとも強い。
8. 暗褐色土　下部に黄褐色粘土ブロックを含む。
9. 黒褐色土　黄褐色粘土粒子を少量含む。

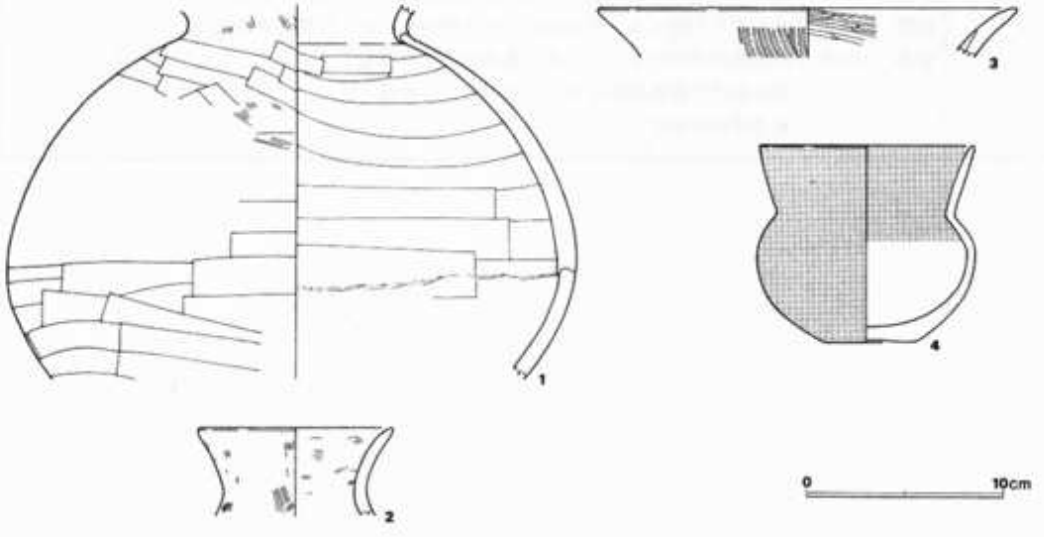
第21図　第1号溝実測図



第22図　第1号溝遺物出土位置図(1)



第23図　第1号溝遺物出土位置図(2)



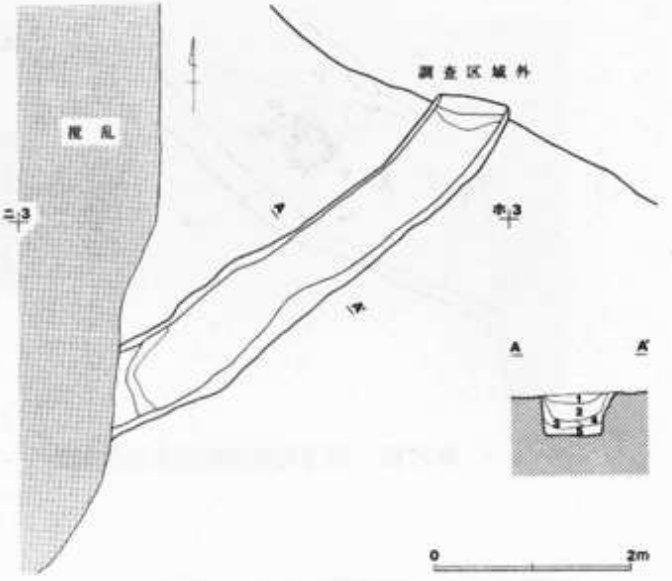
第24図　第1号溝出土遺物実測図

第13表　第１号溝出土遺物　（第24図）

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	胴径　(29.1)	胴部最大径を中位よりやや下に持ち、肩部から胴部にかけて大きく膨らむ。肩部の張りが強い。器肉は、胴部中位にいくにつれ厚くなる。胴部外面は摩滅のため調整不明瞭であるが、丁寧なヘラナデを行なった後、一部をナデ消したと思われる。上位には刷毛目も見られる。頸部内面はナデ調整。胴部全体に粗いヘラナデ後、中位から下にかけての部分はナデ消される。内面に輪積み痕が残る。胴上半部40%残。	胎土　H少、AEF微 B若干 焼成　普通 色調　淡橙褐色	
2	壺	口径　(10.0)	口縁部は緩やかに外反し、端部近くで僅かに内彎する。口縁部内・外面とも刷毛整形後にナデ調整。口縁部20%残。	胎土　EFH微 焼成　普通 色調　橙色	
3	甕	口径　(21.4)	口縁部は大きく外反する。外面、口唇部から口縁部中位にかけて横ナデ、中位から下位は太い刷毛目。内面、口唇部は横ナデ、口縁部横方向のヘラ磨き。口縁部25%残。	胎土　E少、FH微 焼成　良好 色調　黒灰色	
4	坩	口径　11.0 胴径　11.2 底径　4.6 器高　10.0	胴部は扁平気味。底部は僅かに凹んでいる。頸部は「く」の字状に屈曲。口縁部は直線的に外傾し若干内彎する。全体的に保存状態不良のため調整は不明である。外面、頸部内面より口縁部にかけて赤色塗彩を施す。70%残。口縁部・底部はほぼ完存。	胎土　E多 焼成　普通 色調　淡橙褐色	

第２号溝（第25・26・27図）

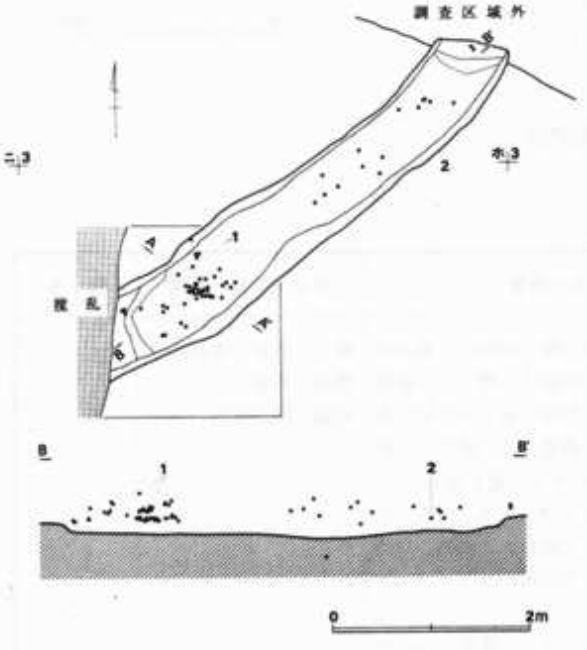
調査区の北西ニ－２～３グリッドに位置する。遺構の北側は調査区域外となり、南側は攪乱を受ける。全容は不明であるが、北東方向に延びる溝である。溝幅はほぼ一定であり、壁は北側が垂直に近いのに対し、南側はやや傾斜をもち緩やかに掘り込まれる。底面は、若干の高低差はあるが全体的に平坦である。規模は、検出部分で長径4.7m、短径0.8m、深さ40cmを測る。遺物は、南端部に多く分布し、その集中部分から甕形土器が１点出土している。他は石器を含め小破片のみである。



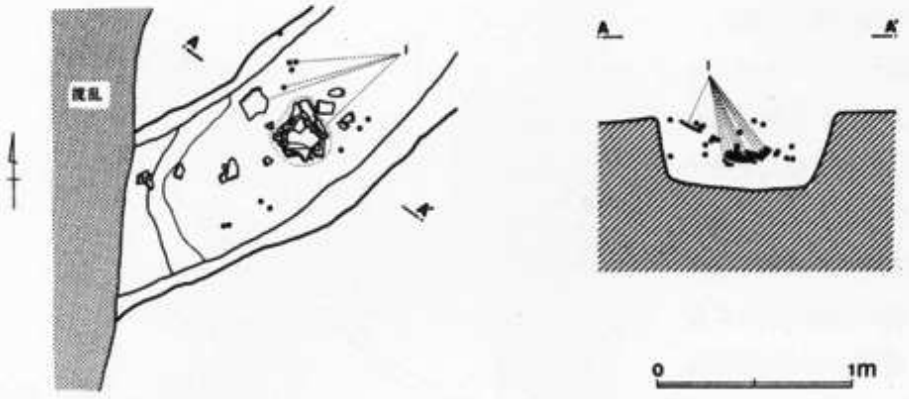
土層註

1. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子、同ブロックを多量に含む。粘性、しまりとも強い。
2. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、しまりとも強い。
3. 黒褐色土　黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性、しまりとも強い。
4. 黄褐色粘土ブロック
5. 黒褐色土　黄褐色粘土粒子を多量に含み、下部には同ブロックを多量に含む。粘性、しまりとも強い。

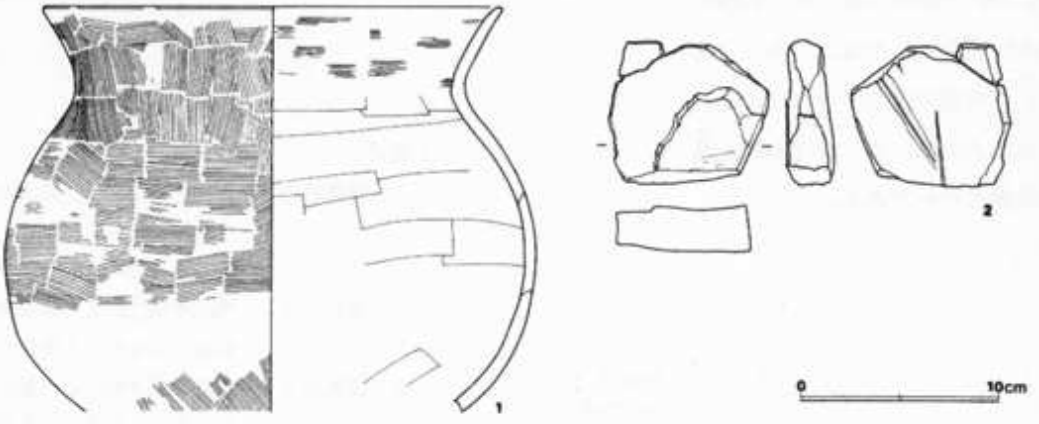
第25図　第２号溝実測図



第26図　第２号溝遺物出土位置図(1)



第27図　第２号溝遺物出土位置図(2)



第28図　第２号溝出土遺物実測図

第14表　第２号溝出土遺物　（第28図）

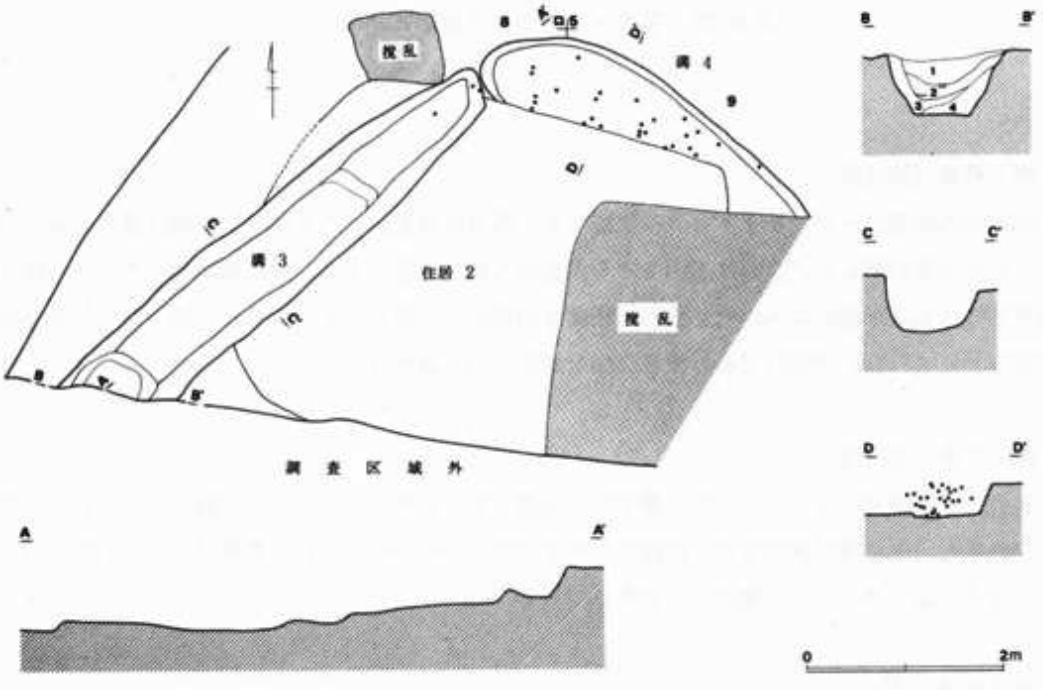
番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	甕	口径　23.5 胴径　27.2	胴部に丸味を持ち、肩部の張りは弱い。頸部は大きく外彎し、口縁部は直線的に開く。口縁部外面は縦方向の刷毛目。内面、横方向の刷毛整形後、丁寧なナデ調整。胴部外面、横方向の刷毛目に加え、一部にヘラケズリの痕も見られる。その後、ナデによって仕上げられる。内面、木口状工具によるナデ後、丁寧なナデ調整。外面には若干煤が付着する。75%残。	胎土　E少、AH若干 焼成　良好 色調　暗茶褐色	
2	石　器	―――	砥石カ。破砕された状態にあり、原型がつかめない。一部に平坦面（使用面カ）を残す。砂岩。		

第３号溝（第29図）

調査区の南西端イ－５グリッドに位置する。南側が調査区域外となる。第２号住居跡と切り合って構築される。新旧関係は、本跡の方が古い。南側が調査区域外となるため全容は不明であるが、南西に延びる様子を示す。形態は南西に向かって幅が広く、段をもって深くなる。壁は両側とも緩やかな傾斜をもって掘り込まれる。横断面は凹型である。規模は、検出部分で長径4.9m、短径0.9m、深さ60cmを測る。遺物は比較的少なく、小破片のみである。

第４号溝（第29図）

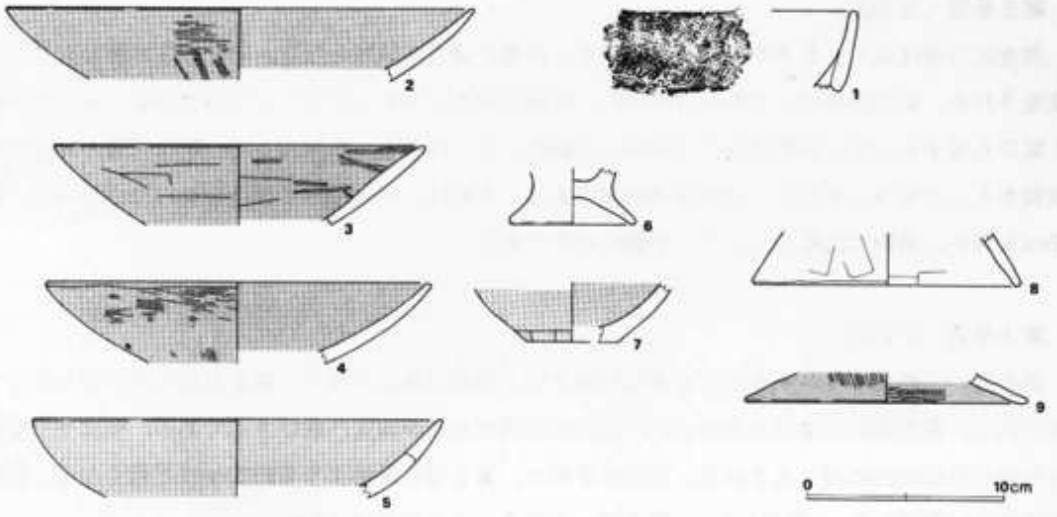
調査区の南西部イ～ロ－５グリッドに位置する。南側は撹乱となり、第２号住居跡と切り合って構築される。新旧関係は本跡の方が古い。全容は不明であるが南東へ延びる溝である。壁はやや傾斜をもちながら直線的に掘り込まれる。底面は平坦で、第２号住居跡よりも約20cmほど低くなる。規模は、検出部分で長径3.2m、短径1.2m、深さ30cmを測る。出土遺物は比較的少ない。



土層註

1. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子、同ブロックを含む。
2. 黒褐色土　黄褐色粘土粒子を含む。
3. 黒褐色土　２よりやや粗い黄褐色粘土粒子を含む。
4. 黒褐色土　黄褐色粘土粒子、同ブロックを多量に含む。

第29図　第３・４号溝実測図及び遺物出土位置図



第30図　第３・４号溝出土遺物実測図

第５号溝（第31図）

調査区の西側イ～ロ－４グリッドに位置する。西側は調査区域外となり、東側は第６号溝と切り合う。本跡の方が新しい。全容は不明であるが北西へ延びる溝である。壁は傾斜をもちながら緩やかに掘り込まれる。東側がコーナーとなる。底面は南側が若干深くなるが、ほぼ平坦である。規模は、検出部分で長径3.4m、短径1.2m、深さ35cmを測る。出土遺物は少ない。

第６号溝（第31図）

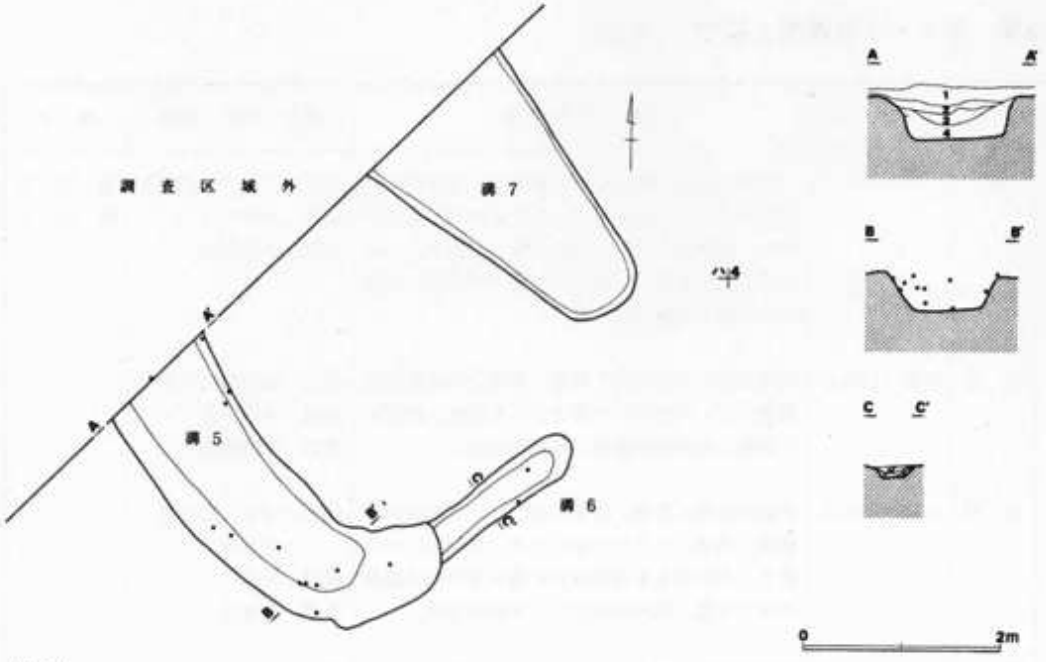
調査区の西側ロ－４グリッドに位置する。南側で第５号溝と切り合う。本跡の方が古い。全容は不明であるが、短く浅い溝である。底面はほぼ平坦で多少の凹凸がある。規模は、長径1.7m、短径0.4m、深さ10cmを測る。出土遺物は２点のみである。

第７号溝（第31図）

調査区の西側ロ－３～４グリッドに位置する。第５号溝と並行するようである。西側は調査区域外となり全容は不明であるが、北西へ延びる溝である。掘り込みは浅く、底面は平坦である。規模は検出部分で長径2.9m、短径1.8m、深さ10cmを測る。出土遺物は認められなかった。

第15表　第３・４号溝出土遺物　（第30図）

番号	器種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	―――	口縁部の破片。複合口縁を呈する。口唇部に平坦面をもつ。外面上位に１条のＳ字状結節文が廻り、結節文の下にＬＲの斜縄文を施す。一部に横方向の刷毛目が残る。内面ナデ調整。内面には赤彩の痕跡が見られる。	胎土　Ｅ少、ＡＦ若干 焼成　やや不良 色調　淡橙褐色	第３号溝出土
2	高　坏	口径　(24.0)	内彎気味に大きく開く坏部。外面上位は刷毛整形後ナデ。下位はナデおよびヘラ磨き。内面ナデ調整。内外面共赤彩。坏部20％残。	胎土　ＥＨ微、Ｆ若干 焼成　やや不良 色調　暗橙褐色	〃
3	高　坏	口径　(19.0)	直線的に開く坏部。坏部外面、ヘラナデ後ナデ調整。内面、ヘラナデ後にナデ、部分的にヘラ磨き、内外面とも器面保存状態不良のため調整やや不明瞭。内外面共赤彩。坏部25％残。	胎土　Ｇ少、ＥＨ微 ＡＢ若干 焼成　普通 色調　暗褐色	〃
4	高　坏	口径　(19.8)	若干内彎して開く坏部。口唇部は平坦で外反ぎみ。器肉は厚い。外面、刷毛目後ナデ調整。内面、ナデ調整。内外面共赤彩。坏部15％残。	胎土　Ｅ少、ＧＨ微 焼成　良好 色調　赤色	〃
5	高　坏	口径　(21.0)	内彎する坏部。坏部内外面、ナデ調整。内外面共赤彩。坏部20％残。	胎土　Ｅ多、Ｈ微 焼成　良好 色調　淡橙褐色	〃
6	台付鉢	脚径　(6.4)	低く短かい脚台部で、端部は丸味をもつ。底部に若干の平坦面をもつ。調整はナデ。脚台部55％残。	胎土　ＥＨ微 焼成　良好 色調　淡橙褐色	〃
7	鉢	底径　(4.8)	平底の底部。外面下位はヘラ削り後ナデ調整。内面、ナデ調整。内外面赤彩。35％残。	胎土　ＥＧＨ微 Ａ若干 焼成　良好 色調　暗赤褐色	〃
8	台付甕	脚径　(13.6)	直線的に開く脚台部。内・外面ともヘラナデ後ナデ調整。脚台部10％残。	胎土　Ｅ少、Ｈ微 焼成　やや不良 色調　淡褐色	第４号溝出土
9	高　坏	脚径　(14.4)	直線的に大きく開く裾部。外面、刷毛整形後ナデ。内面端部はヘラ磨き、他の部分はナデ。内外面とも赤彩。裾部10％残。	胎土　Ｇ少、Ｈ微 焼成　良好 色調　赤褐色	〃



土層註

1. 暗褐色土　橙色粒子を微量含む。
2. 暗褐色土　黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性やや弱く、しまり強い。
3. 黒褐色土　黄褐色粘土ブロックを多量に含む。粘性やや弱く、しまり強い。
4. 黒褐色土　黄褐色粘土を含む。粘性、しまりとも強い。
5. 明褐色土　黄褐色粘土粒子、同ブロックを多量に含む。粘性、しまりとも強い。

第31図　第5・6・7号溝実測図及び遺物出土位置図

(5) その他の遺構と出土遺物（第32図・第16表）

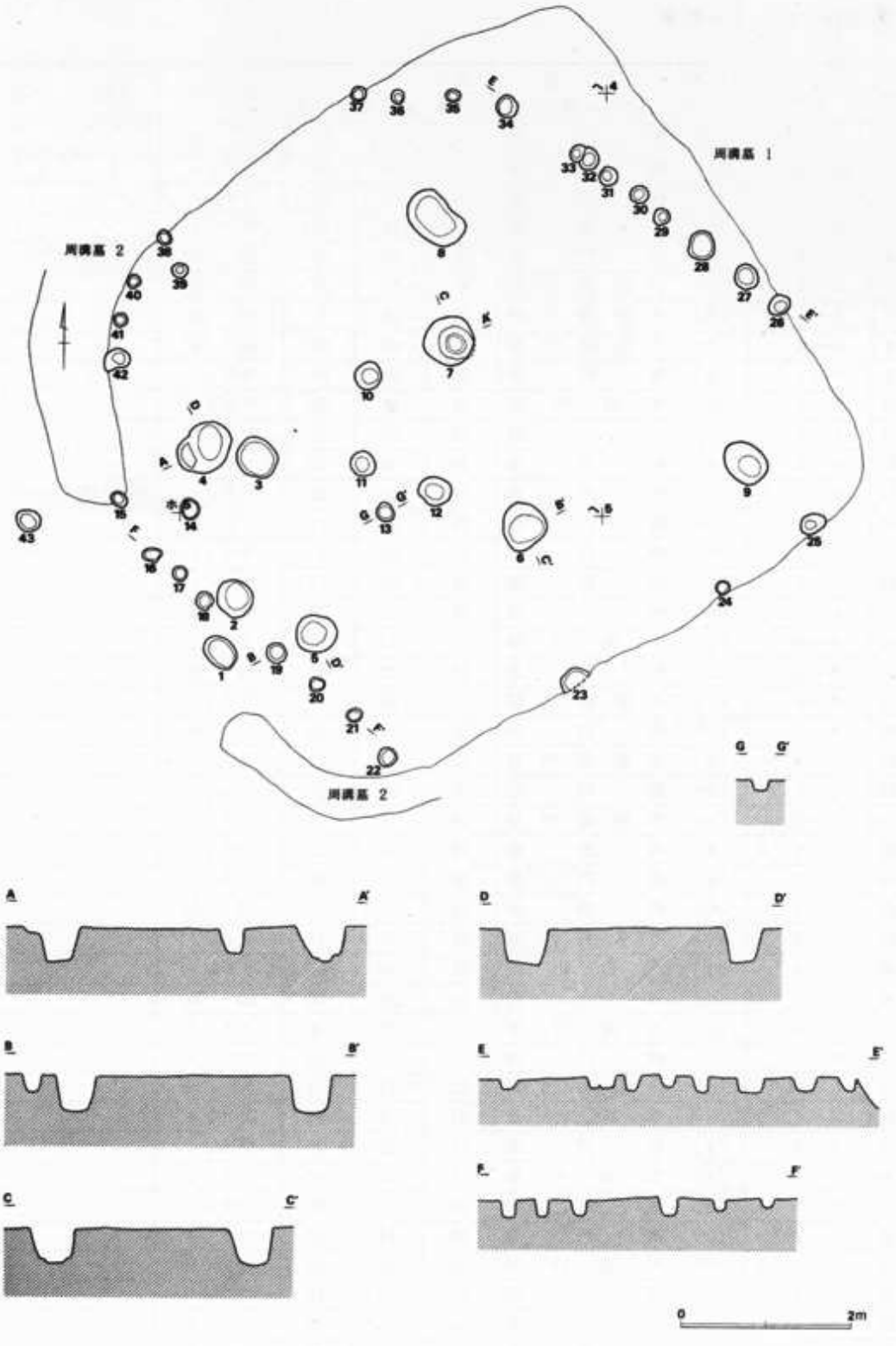
調査区中央より東側にピットが多数検出された。ニ～ヘ－3～5グリッドに位置する。総数43箇所に及ぶ。その分布は、第2号方形周溝墓の方台部及びブリッジ付近である。各ピットの大きさ及び形態については、第16表のとおりである。第6・7号ピットについては底面に柱痕と思われる掘り込みが認められた。遺物はP13から鉢が1点（第33図－1）が検出されている。

なお、第16表中の形態における大きさの別は、長軸を基準に大型（41～73cm）、中型（31～40cm）、小型（16～30cm）に分類した。

(6) グリッド出土の遺物（第33図）

遺構に伴わない遺物としてグリッドで取り上げたものである。いずれも第2層の暗褐色土層中から出土したものである。

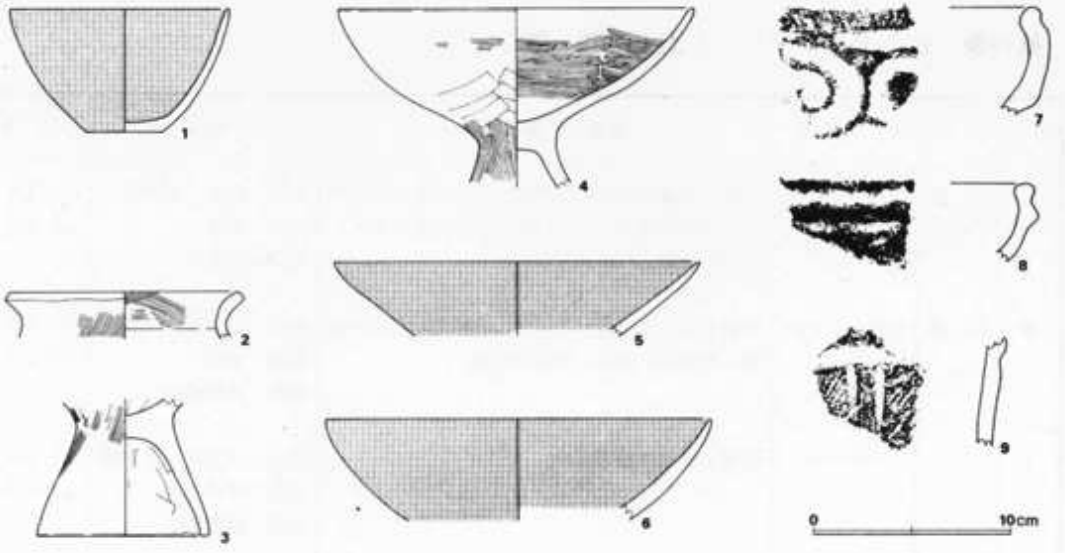
他に、本遺跡からは縄文時代の土器が数点出土している。遺構に伴うものはなく、古墳時代の遺構の覆土、あるいは暗褐色土層中から出土したものである。いずれも縄文時代中期のもので、形態の明らかなもの、あるいは接合可能なものはなかった。



第32図　第1～43号ピット実測図

第16表　ピット一覧表

No.	グリッド	形態 （　）は、大型・中型・小型	規模（cm） 長軸	短軸	深さ	底面形	備考
1	ホー5	（大）楕円形	44	32	23	凹状	
2	ホー5	（大）楕円形	46	41	10	フラット	
3	ホー4	（大）楕円形	53	45	26	フラット	
4	ホー4	（大）不整楕円形	69	56	41	フラット	
5	ホー5	（大）楕円形	50	45	40	凹状	
6	ホー4・5	（大）不整楕円形	57	53	41	凹状	
7	ホー4	（大）不整楕円形	60	58	41	凹状	
8	ホー4	（大）不整楕円形	73	47	23	凹状	
9	ヘー4	（大）楕円形	56	44	27	フラット	
10	ホー4	（中）不整円形	33	31	28	フラット	
11	ホー4	（中）円形	31	30	15	フラット	
12	ホー4	（中）楕円形	40	34	42	フラット	
13	ホー4・5	（小）楕円形	24	20	12	フラット	鉢形土器（33－1）出土
14	ホー4・5	（小）楕円形	25	21	17	フラット	
15	ニー4	（小）楕円形	21	16	17	フラット	
16	ニー5	（小）楕円形	23	16	19	フラット	
17	ニ・ホー5	（小）円形	18	17	20	凹状	
18	ホー5	（小）不整円形	22	20	18	フラット	
19	ホー5	（小）円形	24	23	21	凹状	
20	ホー5	（小）不整楕円形	18	16	14	フラット	
21	ホー5	（小）楕円形	19	15	10	凹状	
22	ホー5	（小）不整楕円形	22	21	22	フラット	
23	ホー5	（中）楕円形	38	38	20	フラット	
24	ヘー5	（小）不整楕円形	16	16	4	フラット	
25	ヘー4・5	（中）楕円形	32	25	12	フラット	
26	ヘー4	（小）楕円形	28	24	24	フラット	
27	ヘー4	（中）楕円形	31	27	15	凹状	
28	ヘー4	（中）不整楕円形	34	30	17	フラット	
29	ヘー4	（小）不整円形	21	19	19	フラット	
30	ヘー4	（小）円形	21	20	14	凹状	
31	ヘー4	（小）不整円形	22	21	18	フラット	
32	ホー4	（小）楕円形	27	22	14	フラット	
33	ホー4	（小）不整楕円形	22	15	14	凹状	
34	ホー4	（小）不整円形	27	25	10	フラット	
35	ホー4	（小）楕円形	18	15	20	フラット	
36	ホー4	（小）不整円形	17	15	16	フラット	
37	ホー3・4	（小）楕円形	20	17	20	フラット	
38	ニー4	（小）楕円形	20	17	26	フラット	
39	ニ・ホー4	（小）不整円形	20	18	16	凹状	
40	ニー4	（小）円形	16	16	13	フラット	
41	ニー4	（小）円形	16	16	14	フラット	
42	ニー4	（小）不整楕円形	28	22	22	フラット	
43	ニー5	（小）不整楕円形	29	26	8	フラット	



第33図　ピット及びグリッド出土遺物実測図

第17表　ピッド及びグリッド出土遺物　(1)　(第33図)

番号	器　種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	鉢	口径　11.3 底径　3.8 器高　6.3	平底の底部で、体部は緩やかに内彎して開く。口唇部は平坦である。内外面ともナデ調整。底部外面に黒斑あり。底部外面を除いた部分には赤色塗彩が施される。70%残。底部完存。	胎土　E多、H少、AF若干 焼成　普通 色調　淡褐色	ピット13出土
2	甕	口径　(12.2)	頸部は緩やかに外彎し、口縁部は短かく直線的に開く。口唇部に平坦面をもつ。口縁部内外面ともナデ調整後刷毛目。頸部内面、ナデ調整。口縁部10%残。	胎土　H微、A若干 焼成　良好 色調　淡橙色	ホー4とホー5グリッドの境出土
3	台付甕	脚径　8.8	内彎気味に開く脚台部。外面、刷毛整形後ナデ調整。甕部底部・脚台部内面は木口状工具によるナデの後ナデ調整。脚端部の一部を欠損するが、ほぼ全周残存する。	胎土　H少、AE微 焼成　良好 色調　赤橙色	ホー5グリッド出土
4	高　坏	口径　18.2 現存高　9.2	脚部は外彎気味に開き、坏部はやや内彎して開く。脚部外面、刷毛整形。内面はナデ調整。坏部外面、刷毛整形後にナデ調整。外面下部はヘラナデ後、ナデ調整。内面はヘラ磨きおよびそれ以外の部分はナデ調整。外面に煤が若干付着する。坏部75%、脚部20%残。	胎土　H少、ABF微 焼成　良好 色調　褐色	ホー3グリッド出土

第18表　ピット及びグリッド出土遺物 (2)

番号	器種	大きさ（cm）	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
5	高杯	口径 (18.6)	坏部は直線的に大きく開き、上位で若干屈曲する。口唇部は丸く尖る。坏部内外面ともナデ。内外面赤彩。坏部30%残。	胎土　H微、E若干 焼成　良好 色調　暗褐色	ニー4グリッド出土
6	高杯	口径 (19.6)	内彎して大きく広がる坏部。内外面ともナデ調整。内外面、赤彩。坏部10%残。	胎土　GH微、A若干 焼成　良好 色調　淡橙褐色	へー5グリッド出土
7		———	縄文土器の口縁部破片。	胎土　AH少、DF微 焼成　やや不良 色調　淡橙褐色	ロー5グリッド出土
8		———	縄文土器の口縁部破片。	胎土　AFH少 焼成　やや不良 色調　淡茶褐色	ニー5グリッド出土
9		———	縄文土器の胴部破片。	胎土　FH少、A微 焼成　やや不良 色調　淡褐色	ニー5グリッド出土

6 結　語

1．遺構について

今回の調査によって検出された遺構は住居跡２軒、方形周溝墓２基、溝７本、土壙１基、ピット43箇所である。住居跡及び方形周溝墓は、いずれも古墳時代前期五領式期の所産である。鍛冶谷・新田口遺跡に於ける住居跡及び方形周溝墓の総数は住居跡39軒、方形周溝墓103基を数えることになる。以下、住居跡及び方形周溝墓についてまとめておきたい（註１）。

住居跡

住居跡は２軒検出されている。第１号住居跡は面積約30.8㎡である。形態はやや隅丸な正方形プランをとる。本遺跡の中では中型Ａと大型（註２）の中間に分類されるものである。

第２号住居跡は推定面積約18.0㎡である。形態は隅丸長方形となる。分類上中型Ｂ類とされるものである。また、検出された２軒の住居跡はいずれも焼失家屋である。

方形周溝墓

方形周溝墓は２基検出された。二基が重なるような形であり同方向にブリッジをもつもので、本遺跡では最も多く約50％を占める南西方向に主軸をとるものである。分類上Ｂタイプ（註３）に属するものである。規模は、第１号方形周溝墓は面積169.0㎡を測り、最も多く検出されている中型Ａ類（註４）に、第２号方形周溝墓は面積約76.6㎡を測り、小型に分類されるものである。

また、第２号方形周溝墓には南西コーナーに一段と深くなる土壙状の掘り込みがある。掘り込みの部分からは炭化物や焼土、さらには高坏が伏せたような状態で出土している。『鍛冶谷・新田口遺跡』の報文中で西口氏は、成人の埋葬が可能な土壙として推察し「壙中埋葬をもつ方形周溝墓の被葬者には家長とその家族構成員をあて…」としている（註５）。本跡のそれも底面の長径が約1.5mであり、若干小型ではあるが同種の壙中埋葬施設として理解することができる。

次に、本遺跡の特徴でもあるが遺構が切り合って構築されている状況がある。当調査地も同様なので重複関係をまとめておきたい。

まず調査区東側に第１号住居跡、第１・２号方形周溝墓、第１号溝が構築されている。新旧関係は次のとおりである。

第２号方形周溝墓→第１号方形周溝墓→第１号住居跡、第１号方形周溝墓→第１号溝

次に調査区西側には第２号住居跡、第３・４号溝が構築されている。新旧関係は次のとおりである。なお、第３・４号溝の重複部分はなく、形態や深さ等が異なり同一遺構としては考えられない。

第３号溝→第２号住居跡、第４号溝→第２号住居跡

以上、検出された遺構についてのまとめとする。

2．出土土器について

今回の調査により検出された遺物は縄文式土器数片と弥生時代後期から古墳時代前期の遺物である。

出土遺物の大半は遺構から検出されたもので、調査区域のほとんどが前建築物の撹乱によることもあって包含層から出土したものは少数である。出土した土器は壺形土器・甕形土器・高坏形土器・器台形土器・坩形土器・小型壺形土器・鉢形土器と多種にわたっており、各器種ごとに次のように分類することができる。

出土土器の分類

〔壺形土器〕

A類：複合口縁のもの。15－2

B類：単純口縁のもの。

　B１類－頸部から口唇部にかけて「く」の字に屈曲するもの。15－1　17－1

　B２類－頸部が直立し外反するもの。７－1

C類：広口壺形土器。複合口縁を呈するものである。20－1

〔甕形土器〕

A類：口縁端部に刻み目を有せず、頸部が「く」の字に屈曲するもの。外面整形の刷毛目を残すもの。

　７－6　10－1　17－6　28－1　20－7　箆によるナデ調整を加えるもの。　15－15　20－8

〔高坏形土器〕

A類：体部が内彎する椀状の坏部をもつもの。17－12

B類：体部が直線的あるいは緩やかに内彎する坏部をもち、坏部下半に稜をもつもの。７－７・8

〔器台形土器〕

A類：直線的あるいは緩やかに内彎する器受部をもつもの。７－12・13・14

B類：屈曲して立ち上がる器受部をもつもの。７－15　16－32

　※A・B類ともに貫通孔を有するものである。

〔坩形土器〕

A類：頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部は直線的に開くもの。胴部は球形を呈す。24－4

〔小型壺形土器〕

A類：口縁部径が胴部径よりやや小さく長胴のもの。20－6

〔鉢形土器〕

A類：体部は緩やかに内彎し口縁部は直立するもの。上げ底状になるもの16－31と、平底のもの３３－１がある。

B類：体部が大きく内彎し、口縁部が短く直立するもの。７－11

本調査区において検出された遺物は以上である。

3．まとめ

今回の調査地は、上戸田川に接するため鍛冶谷・新田口遺跡の北西縁を確認したことになる。今までに明らかにされている東縁との距離は約250mを測り、集落の主体的な部分の広さは約８万㎡に及ぶ大きな規模となる。現在までに調査されている面積は約12,700㎡であり約６分の１にあたる。また、検出されている主な遺構は住居跡39軒、方形周溝墓103基を数えるものとなっており、集落の形態にもよるが全体を考えると想像をこえるものといえよう。

鍛冶谷・新田口遺跡は、荒川（旧入間川）の下流域の自然堤防上における弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた集落跡として数次にわたる調査が行われてきた。近在する同時期の遺跡としては、東へ約0.7kmのところに前谷遺跡（註６）が、荒川を望む南の方向には、約1.3kmの間に上戸田本村遺跡（註７）、南町遺跡（註８）、南原遺跡（註９）の３遺跡が南北に連なって存在している。さらに周辺には根木橋遺跡（註10）、浦和市本村遺跡（註11）、対岸には板橋区早瀬前遺跡（註12）が確認されている。自然堤防上の遺跡（特に方形周溝墓）について鈴木敏弘氏は、新倉午王山遺跡の報告で「方形周溝墓の展開」期として「墓域も村落の一部として自然堤防上へ進出することは注目すべきだろう。」と指摘されている（註13）。本遺跡は住居区域と墓域が混在している状況にあり、比較的短い間隔で築造されたことが考えられ、集落の構造を明らかにしてゆくことが今後の課題といえよう。

註１　ここでは、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団により報告されている「鍛冶谷・新田口遺跡」において住居跡、方形周溝墓の分類がされているので、その中に位置付けをしておきたい。
西口正純　「鍛冶谷・新田口遺跡」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1986

註２　規模について大型（32.5～49㎡）、中型Ａ（23.5～28.6㎡）、中型Ｂ（14.3～19.3㎡）、小型（４～12.6㎡）に分類されている。

註３　形態について、Ａ～Ｈタイプの８種類に分類されている。本跡は、Ｂタイプで「周溝の一辺中央にブリッジを持つもの」として分類されている。

註４　規模について特大型（395㎡以上）、大型（234～243㎡）、中型Ａ（131～196㎡）、中型Ｂ（72～122㎡）、小型（53㎡以下）に区分されている。

註５　註１の文献に同じ

註６　塩野博・伊藤和彦　「前谷遺跡発掘調査概要」　戸田市文化財調査報告ＸⅢ　戸田市教育委員会　1978

註７　「戸田市史　資料編Ⅰ」　戸田市　1981

註８　塩野博他　「南町遺跡Ⅰ」　戸田市遺跡調査会報告第１集　戸田市遺跡調査会　1987

註９　塩野博・伊藤和彦　「南原遺跡第１次発掘調査概要」　戸田市文化財調査報告Ⅲ　戸田市教育委員会　1970
同　　上　　「南原遺跡第２・３次発掘調査概要」　戸田市文化財調査報告Ⅴ　戸田市教育委員会　1972

註10　塩野博・伊藤和彦　「根木橋遺跡第１次発掘調査概要」　戸田市文化財調査報告Ⅷ　戸田市教育委員会　1974

註11　青木義脩・高山清司他　「本村遺跡発掘調査報告書」　浦和市遺跡調査会報告書第80集　浦和市遺跡調査会　1987

註12　守屋幸一他　「新河岸三丁目早瀬前遺跡」　新河岸三丁目早瀬前遺跡調査会　1988

註13　鈴木敏弘他　「新倉午王山遺跡」　和光市午王山遺跡調査会　1981

参考文献

山崎武他　「赤台遺跡」　鴻巣市遺跡調査会報告書第５集　鴻巣市遺跡調査会　1985

諸墨知義・山形洋一他　「鎌倉公園遺跡」　大宮市遺跡調査会報告第９集　大宮市遺跡調査会　1984

鈴木敏弘他　「成増一丁目遺跡発掘調査報告」　成増一丁目遺跡調査会・板橋区教育委員会　1981

大村直他　「神谷原Ⅰ」　八王子市椚田遺跡調査会　1981

同　　上　「神谷原Ⅲ」　八王子市椚田遺跡調査会　1982

横川好富　「埼玉県の古式土師器」　埼玉県史研究第10号　埼玉県史編さん室　1983

金井塚良一他　「五領遺跡Ｂ区の発掘調査」　台地研究№13　台地研究会　1963

同　　上　　「シンポジューム五領式土器について」台地研究№19　台地研究会　1971

日本考古学協会編　「シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題」　1988

庄野靖寿・笹森紀己子他　「尾ケ崎遺跡」　庄和町・尾ケ崎遺跡調査会　1984

「新編埼玉県史　資料編２」　埼玉県　1982

「戸田市史　通史編上」　戸田市　1986

(1) 鍛冶谷・新田口遺跡Vの位置

(2) 調査区全景（東から）

図版 2

(1) 第 1 号住居跡（南から）

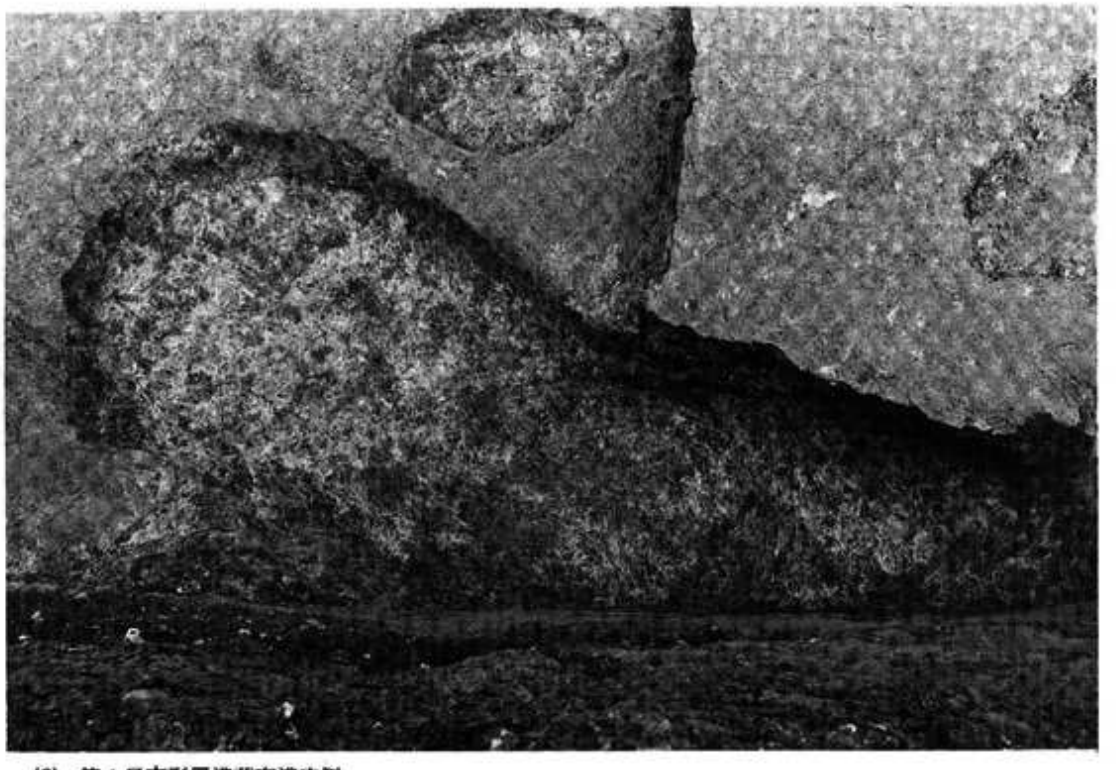
(2) 第 2 号住居跡（南から）

(1) 第1号住居跡土器出土状態（第2図—13）

(2) 第2号住居跡炭化物出土状態

図版 4

(1) 第1・2号方形周溝墓（南西から）



(2) 第1号方形周溝墓南溝東側

(1) 第１・２号方形周溝墓北溝（東から）

(2) 第１号方形周溝墓土器出土状態（第１６図－３２）

(3) 第２号方形周溝墓土器出土状態１（第１７図－１２）

(4) 第２号方形周溝墓土器出土状態２（第１７図－６）

図版 6

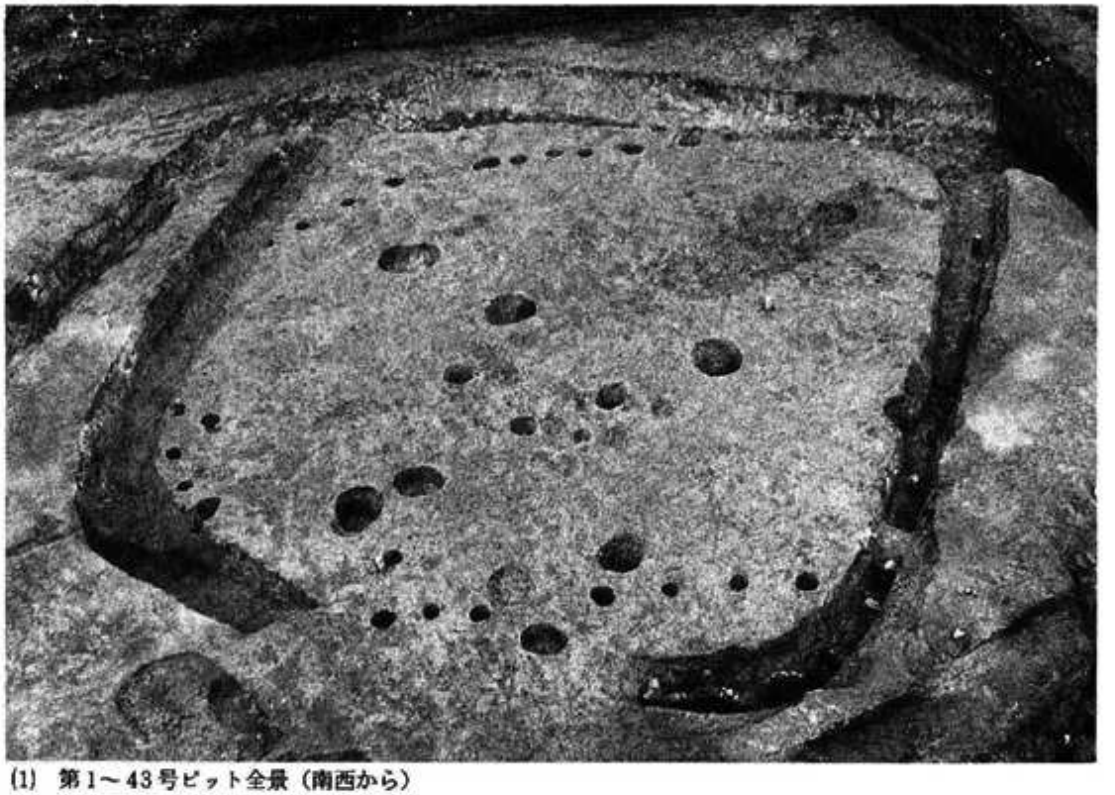
(1) 第１号土壙（北から）

(2) 第１号土壙土器出土状態（第２０図－１・６他）

(1) 第1号溝
(東から)

(2) 第1号溝遺物取り上げ風景

図版 8

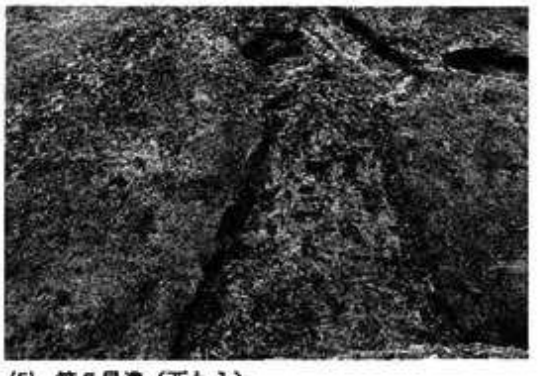


(1) 第1～43号ピット全景（南西から）

(2) 第2号溝（北西から）

(3) 第3・4号溝（南から）

(4) 第5・6号溝（西から）



(5) 第7号溝（西から）

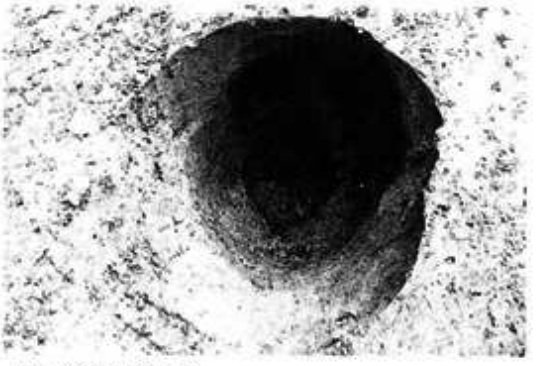
(1) 第1号ピット

(2) 第3号ピット

(3) 第4号ピット

(4) 第5号ピット

(5) 第6号ピット



(6) 第7号ピット

(7) 第8号ピット

(8) 第9号ピット

図版10

(1) 第1号住居跡出土遺物1（第7図－1）

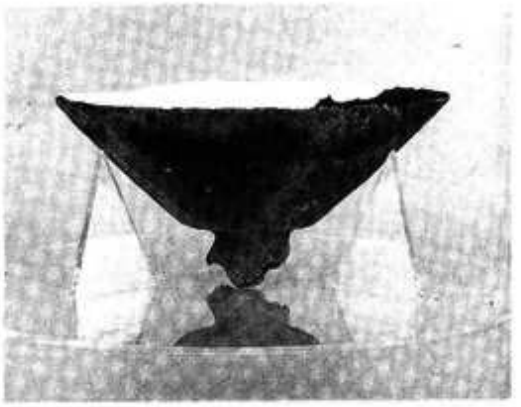
(2) 第1号住居跡出土遺物2（第7図－11）

(3) 第1号住居跡出土遺物3（第7図－12）

(4) 第1号住居跡出土遺物4（第7図－13）

(5) 第1号住居跡出土遺物5（第7図－14）

(6) 第1号住居跡出土遺物6（第7図－3）



(1) 第1号住居跡出土遺物7 (第7図－7)

(2) 第2号住居跡出土遺物 (第10図－1)

(3) 第1号方形周溝墓出土遺物1 (第15図－1)

(4) 第1号方形周溝墓出土遺物2 (第15図－15)

(5) 第1号方形周溝墓出土遺物3 (第16図－32)

(6) 第1号方形周溝墓出土遺物4 (第16図－31)

図版 12

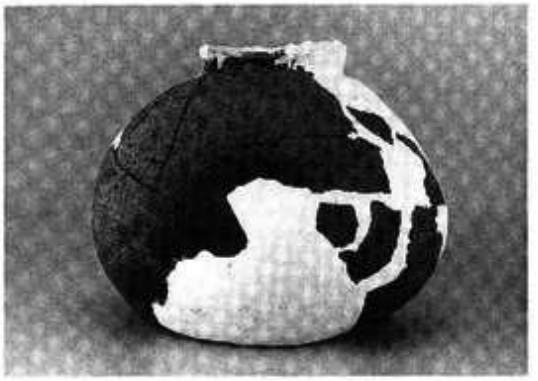
(1) 第2号方形周溝墓出土遺物1（第17図－12）

(2) 第2号方形周墓出土遺物2　（第17図－1）

(3) 第2号方形周溝出土遺物3（第17図－6）

(4) 第1号土壙出土遺物1　（第20図－6）

(5) 第1号土壙出土遺物2　（第20図－1）



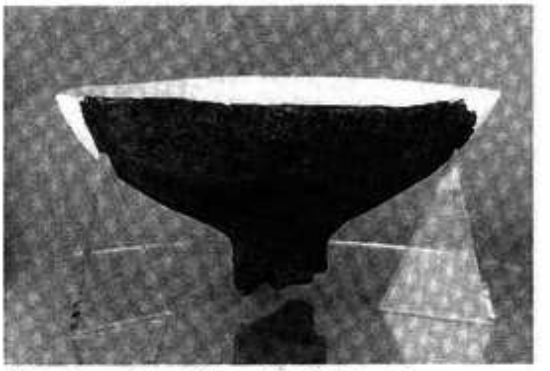
(1) 第1号溝出土遺物1　(第24図－1)

(2) 第1号溝出土遺物2　(第24図－4)

(3) 第2号溝出土遺物1　(第28図－1)

(4) 第2号溝出土遺物2　(第28図－2)

(5) 第13号ピット出土遺物　(第33図－1)



(6) グリッド出土遺物　(第33図－4)

鍛冶谷・新田口遺跡 V

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書　第2集

発行日　平成2年3月31日

発　行　戸田市遺跡調査会
戸田市上戸田1－18－1
戸田市教育委員会内

印　刷　㈱カミヤ印刷
浦和市道場3－14－4